

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 243

# 初和古墓

一般国道313号（北条湯原道路）道路改築に伴う発掘調査

2016

岡山県教育委員会



1 遺跡遠景（東から）



2 塚1・2調査前（西から）

巻頭図版 2



1 塚1宝篋印塔と南石塔集積（南西から）



2 塚1断面（西から）

# 序

北条湯原道路は、米子自動車道の湯原インターチェンジと国道9号北条インターチェンジを結ぶ延長約50kmの地域高規格道路で、岡山県北部と鳥取県中部の交流促進を目的として計画されました。この北条湯原道路の一部である真庭市蒜山初和～蒜山下長田間の国道313号初和下長田道路は、従来から幅員が狭く車両通行に支障を来していたため、現道の拡幅及びバイパス化が行われることになり、平成24年度から事業が着手されました。

岡山県教育委員会では、この路線内に位置する初和古墓について、関係部局と協議を重ねてまいりましたが、現状のまま保存することが困難な部分についてやむを得ず記録保存の措置を講じることとし、発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、調査範囲で2基の塚を確認しました。このうち塚1は、南北6.2m以上、東西5.5m以上、高さ1.9mの方形であることがわかり、盛土の下に1.7×2m、深さ1.6mの方形の穴が1基掘られていました。塚1に直接伴う遺物の出土はありませんが、周辺に集積された宝篋印塔と多数の五輪塔は、その規模・形状からほとんどが16世紀後半のものと考えられます。塚1の築造時期もこうした石造物の時期に近いことが推定され、類例の少ない中世末の塚墓の調査例として貴重であると言えます。

本書が地域史研究の資料として、また文化財保護の一助として活用されることを期待いたします。

発掘調査及び報告書作成に当たりましては、美作県民局をはじめとする関係機関や地元住民の皆様から御理解・御協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成28年12月

岡山県古代吉備文化財センター  
所 長 宇 垣 匡 雅

## 例 言

- 1 本書は、一般国道313号（北条湯原道路）道路改築に伴い、岡山県教育委員会が岡山県美作県民局建設部の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが実施した、初和古墓の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査を実施した初和古墓は、真庭市蒜山初和479-1ほかに所在する。
- 3 発掘調査は、平成27年10月から12月に文化財センター職員氏平昭則、石田爲成が担当して実施した。調査面積は420㎡である。
- 4 発掘調査及び報告書作成にあたっては、埋蔵文化財専門委員の稲田孝司氏から御指導と御助言を頂いた。記して深く感謝の意を表す次第である。
- 5 本書の作成は、平成27年度に氏平が担当し、文化財センターにて実施した。
- 6 本書の執筆は、調査担当者が分担して行い、全体の編集は氏平が行った。
- 7 本書の作成にあたり、石造物の石材の鑑定を岡山大学鈴木茂之氏に依頼して有益な御教示を受けた。記して厚くお礼申し上げる。
- 8 遺物写真の撮影にあたっては江尻泰幸の協力と援助を得た。
- 9 本書に収載した遺構・遺物の図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻1325-3）に保管している。

## 凡 例

- 1 本書に用いた高度値は海拔高である。
- 2 調査区配置図・遺構図が示す北方位は平面直角座標第V系（世界測地系）の座標北である。
- 3 調査区配置図・遺構図・報告書抄録に記載したグリッド値・経緯度は世界測地系に準拠している。
- 4 本報告書に掲載した遺構・遺物の縮尺は、個々に明記した。
- 5 掲載の石造物は、番号の前に略号「S」を付し通し番号とした。
- 6 土層の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修）に準拠している。
- 7 本書に掲載した第2図周辺遺跡分布図は、国土地理院発行の1/50,000地形図「奥津」・「湯本」を複製・加筆したものである。
- 8 本書で使用した時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、必要に応じて文化史区分・世紀などを併用した。

# 目 次

卷頭図版	
序	
例 言	
凡 例	
目 次	
第1章 序説	1
第1節 位置と環境	1
第2節 発掘調査および報告書作成の経緯と経過	4
第2章 調査の成果	6
第1節 塚	6
第2節 その他の遺構	14
第3章 総括	15
第1節 中世の古墓について	15
第2節 石塔について	18
五輪塔計測表	21
図版	
報告書抄録	

## 図 目 次

第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000)	1	第11図 塚1周辺出土石塔1 (1/8)	12
第2図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)	2	第12図 塚1周辺出土石塔2 (1/8)	13
第3図 調査区配置図 (1/1,000)	4	第13図 塚2断面図 (1/60)	13
第4図 調査区全体図 (1/300)	7	第14図 土坑1・2 (1/30)	14
第5図 基本土層柱状模式図 (垂直1/60)	8	第15図 初和古墓塚1変遷図 (1/200)	16
第6図 塚1・2墳丘 (1/100)	8	第16図 東中国の塚墓	17
第7図 塚1平面図 (1/60)	9	第17図 蒜山式宝篋印塔実測図 (1/30)	18
第8図 塚1断面図 (1/60)	10	第18図 蒜山式宝篋印塔分布図 (1/1,500,000)	18
第9図 塚1下完掘状況 (1/100)	11	第19図 五輪塔部位別法量分布	19
第10図 塚1下土坑 (1/40)	11		

## 表 目 次

表1 文化財保護法に基づく提出書類一覧	5	表2 五輪塔計測表	21
---------------------	---	-----------	----

## 図 版 目 次

卷頭図版1		図版2	
1 遺跡遠景 (東から)		1 塚1下土坑土層断面 (南西から)	
2 塚1・2調査前 (西から)		2 塚1下土坑完掘 (西から)	
卷頭図版2		3 下段完掘状況 (南東から)	
1 塚1宝篋印塔と南石塔集積 (南西から)		図版3	
2 塚1断面 (西から)		1 中段東側完掘状況 (南東から)	
図版1		2 土坑1 (南西から)	
1 塚1墳丘東西断面 (南西から)		3 土坑2 (西から)	
2 塚1東側石塔出土状況 (南東から)		図版4	
3 塚2墳丘全景 (南西から)		1 塚1周辺出土石塔集合写真	
		2 出土石塔	

# 第1章 序説

## 第1節 位置と環境

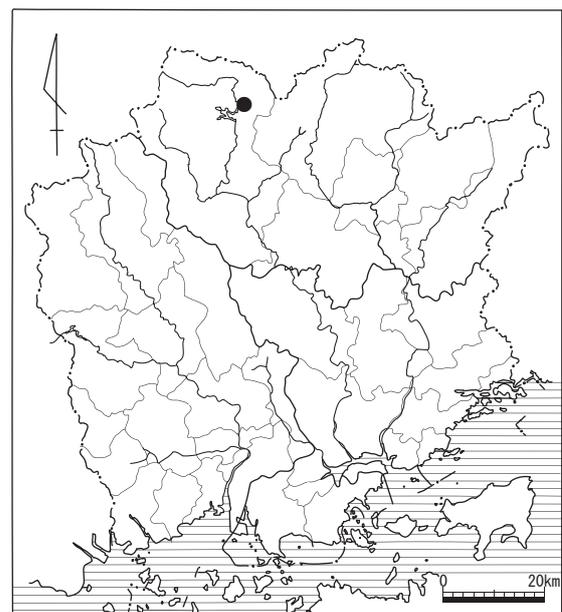
初和古墓は、行政上は岡山県の北端近く、真庭市蒜山初和に位置する。旭川沿いに北へ向かえば蒜山三座、南に行けば湯原温泉に通じる。初和の手前を旭川から別れて下和（したお）川沿いに北上すれば、旧中和村の蒜山下鍛冶屋・吉田・別所を經由して鳥取県の三朝へ向かう。

初和集落は蒜山原の入り口にあたる。蒜山原は北に大山・蒜山火山と南の中国山地に挟まれた盆地である。第三紀末に蒜山火山が形成され、第四紀更新世中後期～ミンデル氷期以前（約35万年前）は深さ100m以上の古蒜山原湖となっていて、川は今とは逆の日本海側へ流れていた。その後大山火山の活動が活発になって流路が瀬戸内側に替わり、火山灰が堆積したのち河川侵食が進んで現在の地形になった。蒜山原北側の表層地質は安山岩、南側は凝灰角礫岩で、下和川沿いと現在の湯原湖周辺では花崗岩質が多く、初和古墓周辺は安山岩質だが、すぐ北の初和集落は花崗岩質である<sup>(1)</sup>。

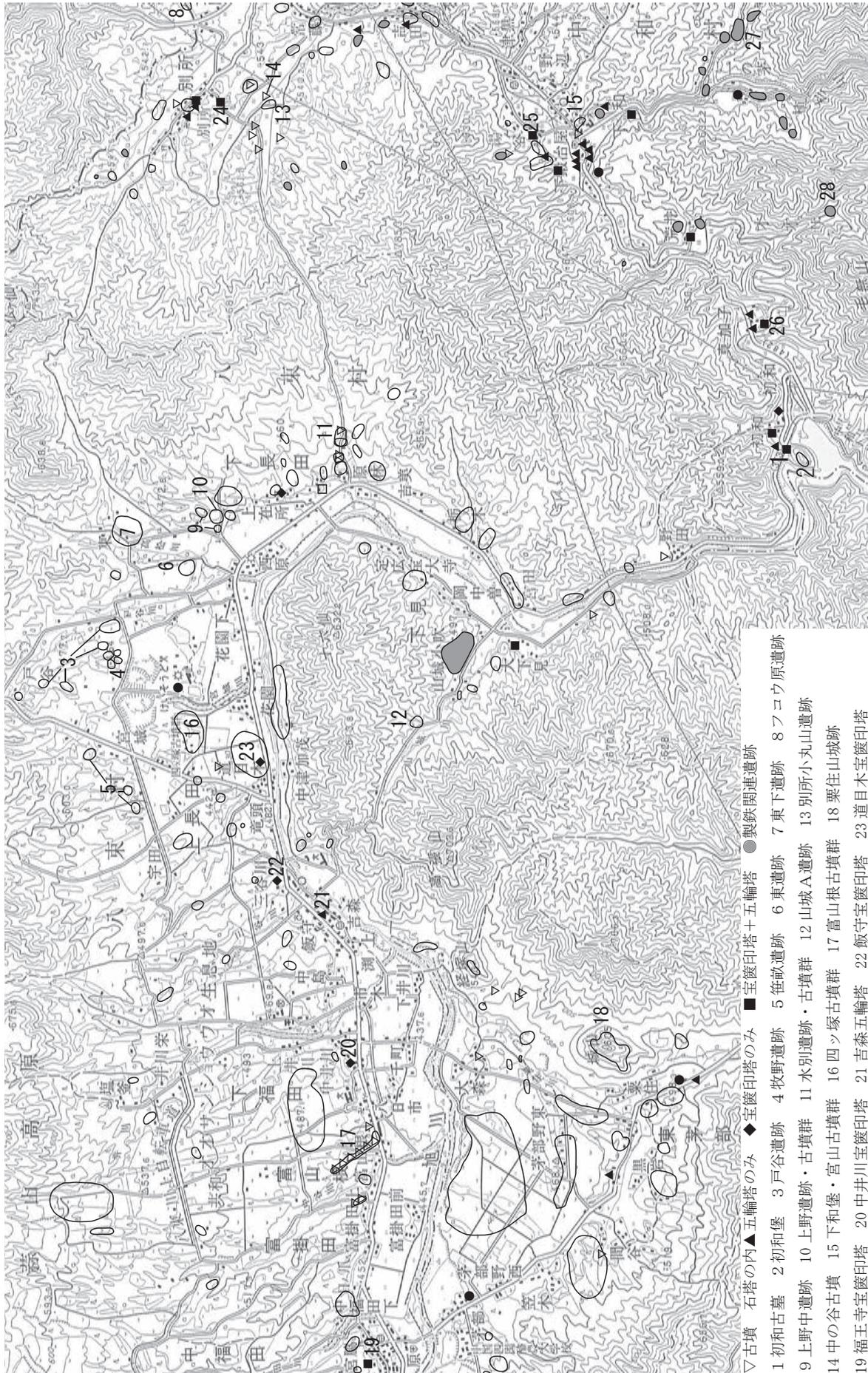
この地域で最初に人類の活動が見られるのは旧石器時代で、大山の火山活動で堆積した火山灰により生活の跡が良好な状態で保存されている。始良Tn火山灰（約2万6千～9千年前）以前では、戸谷遺跡第1・4・5地点<sup>(2)</sup>で縦長剥片を素材とするナイフ型石器、局部磨製石斧などの製品があり、石材が石英を主体とする石核、剥片、チップが多く出土している。始良Tn火山灰より後出としては、東遺跡<sup>(3)</sup>で尖頭器と細石刃を中心とする石器群が3か所確認されている。旧中和村内では、蒜山下和の小林河原遺跡<sup>(4)</sup>で始良Tn火山灰下位より黒曜石製の台形様石器が採集され、蒜山別所のフコウ原遺跡<sup>(5)</sup>では始良Tn火山灰上位よりナイフ型石器などが発見された。

縄文時代に入ると、遺跡の分布範囲が広がる。蒜山西茅部の中山西遺跡<sup>(6)</sup>では、発掘調査により縄文早期の山形押型文を伴う竪穴住居4軒が確認されている。落とし穴は上記の中山西遺跡などで多数発見された。形状は、隅丸方形の掘り方の中央にピット1つがあるものが多い。

弥生～古墳の集落の一端も明らかになっている。下郷原和田遺跡<sup>(7)</sup>では竪穴住居が弥生時代後期で11軒以上、古墳時代前期4軒程度、古墳時代後期3軒以上が見られ、碧玉・チャートの剥片や滑石・ガラス製玉類が出土、玉造工房の可能性がある。一方、初和古墓より南へ6.5kmの下湯原B遺跡<sup>(8)</sup>では、6世紀後葉～7世紀初頭の竪穴住居18軒から小形仿製鏡・鏡形土製品などが出土した。



第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000)



第2図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

古墳は蒜山下和の宮山古墳群<sup>(9)</sup>が箱式石棺を伴うことが知られているが、発掘調査された古墳は中～後期が多い。蒜山上長田の四ツ塚古墳群<sup>(10)</sup>の内13号墳は直径19mの造り出し付き円墳で、主体部は2基の木棺直葬、鏡・須恵器・馬具・玉類・竪櫛などが出土、墳裾を埴輪列が巡り、6世紀前半に位置づけられている。同1号墳は美作で最古に近い横穴式石室を持つ。水別古墳群<sup>(11)</sup>は3基の横穴式石室を持つ古墳で、1号墳は直径7m、外護列石を持ち伯耆地方に類例が見られる玄室長の短い横穴式石室である。6世紀後葉から7世紀後葉～8世紀前半まで続いて埋葬が行われた。

古代以降の集落は調査例が少ない。城山東遺跡<sup>(12)</sup>では、奈良時代後半～平安時代の掘立柱建物群と鍛冶炉を検出している。建物は2×2間の総柱が4棟、側柱2棟である。

中世の山城は小規模なもので下和堡<sup>(13)</sup>などがある。初和古墓の南側丘陵頂部にあったとされる初和堡は、登頂してみた結果人為的な加工の跡が見られないことからその存在は疑問である。

この地域の中～近世の石造物は、宝篋印塔が多いことが従来から指摘されてきた。「蒜山式」としてその特徴をまとめた論文もある<sup>(14)</sup>。著名なものとして、蒜山上徳山の中曾の延助宝篋印塔、蒜山上長田の吉森の五輪塔、道目木の宝篋印塔、蒜山下福田の中井川の宝篋印塔、蒜山下和の本興寺裏宝篋印塔<sup>(15)</sup>などで、旧村落に必ず1基以上の宝篋印塔が分布しているようである。

近世は湯原から下和川流域の花崗岩地帯でたたら製鉄が盛んであった。天保期(1830～1843年)には上徳山村(蒜山上徳山)の村方地主だった徳山集蔵が鉄山経営に乗り出し、真庭市社(旧湯原町)の美谷山鉄山跡、真庭市田羽根(旧湯原町)の束根山鉄山跡を経営していた<sup>(16)</sup>。一方、下和川流域では下和村の福寿山、吉田村の大吉山などの鉄山の名前が挙がっている<sup>(17)</sup>。(氏平)

## 註

- (1) 『土地分類基本調査』大山・湯本 岡山県 1987、『土地分類基本調査』倉吉・奥津 岡山県 1988
- (2) 鎌木義昌・小林博昭「戸谷遺跡」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県 1986
- (3) 「東遺跡Ⅰ」『蒜山文化財調査報告』1 蒜山教育事務組合教育委員会 2003
- (4) 堀川 純「小林河原遺跡採集の台形様石器」『蒜山研究所研究報告』第11号 岡山理科大学 1985
- (5) 小林博昭・平井勝「岡山県」『第22回埋蔵文化財研究会集会 火山灰と考古学をめぐる諸問題』第Ⅱ分冊 埋蔵文化財研究会鹿児島集会実行委員会 1987
- (6) 「中山西遺跡 城山東遺跡 下郷原和田遺跡 下郷原田代遺跡 木谷古墳群 中原古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93 岡山県教育委員会 1995
- (7) 註6文献
- (8) 「下湯原B遺跡 藪澄山城跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』166 岡山県教育委員会 2002
- (9) 『中和の文化財』中和村教育委員会 2003
- (10) 近藤義郎『蒜山原四つ塚古墳群(改訂版)』八束村 1992
- (11) 「水別古墳群・水別遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』131 岡山県教育委員会 1998
- (12) 註6文献
- (13) 註9文献
- (14) 齊藤 孝「仮称「蒜山式」宝篋印塔の存在」『網干善教先生華甲記念考古學論集』網干善教先生華甲記念会 1988
- (15) 蒜山文化財保護委員会『蒜山の文化財』第二集 石造物 蒜山教育事務組合教育委員会 1985
- (16) 宗森英之「鋌山業」『岡山県史』第7巻 近世Ⅱ 岡山県 1985
- (17) 『中和村史』中和村 1975

## 第2節 発掘調査および報告書作成の経緯と経過

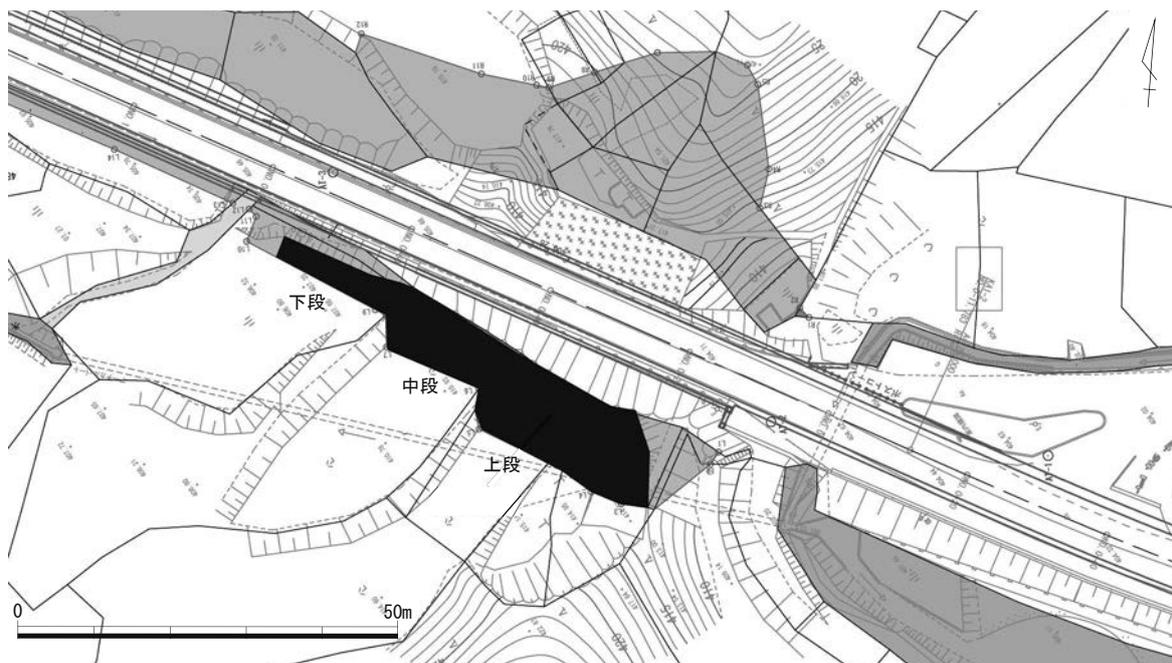
### 1 発掘調査に至る経緯

北条湯原道路はこれまで分割して整備されており、犬狹峠道路区間では平成7年度に下長田上野古墳群と上野遺跡、禾津一下湯原バイパス区間では平成11・12年度に下湯原B遺跡と藪辻山城跡を発掘調査している。今回の整備事業は、真庭市蒜山初和～蒜山下長田間6.2kmの初和下長田道路区間であり、県教育委員会が分布調査や現地確認を行い、路線内に初和古墓が所在することを確認した。初和古墓は塚状の高まりとその周辺に宝篋印塔や五輪塔が散在する状況であり、高まりを中心に墓地関連遺構の存在が想定された。県教育委員会はその扱いについて関係機関と協議を進めたが、現状での保存が困難であるとの結論に達した。平成27年5月1日付けで美作県民局長から文化財保護法第94条に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」が提出され、県教育委員会教育長から工事着手前に発掘調査を実施する旨の勧告がなされ、県古代吉備文化財センターが発掘調査に着手する運びとなった。（氏平）

### 2 発掘調査および報告書作成の経過

発掘調査は平成27年10月から12月まで調査員2名で実施した。調査地は現在の初和集落西端、旭川へ向かって落ちていく山塊とそこから南に張り出す独立丘陵の間の鞍部に位置する。北側は現国道313号に切断され、東側も急斜面であるが、頂部から西側へは南北方向に延びる3段の平坦面が作られている。以後、塚状の高まりが位置する頂部平坦面から順に上段・中段・下段と呼称する。

調査は、遺構の密集が予想された上段の塚状高まりとその周囲については表土以下を人力で除去し、それ以外の上段西側と中段・下段は表土を重機で除去して遺構検出に努めた。中段は工程上東西に分割して調査を行ったが、縄文時代の土坑1基を検出した以外、遺構・遺物は確認していない。下段は



第3図 調査区配置図（黒塗り：1/1,000）

表土直下で黄色基盤層となる。開墾による削平を受けており、遺構・遺物は存在しなかった。

調査で出土した石造物の取り扱い、一部の特徴的なものを本書に掲載してセンターで保管することとし、その他については現地での観察と計測の後、蒜山中福田の福王寺で保管している。

発掘調査終了後、平成28年1月～3月で調査員1名が整理・報告書作成作業を実施した。（氏平）

### 3 発掘調査・報告書作成の体制

平成27年度 <b>岡山県教育委員会</b> 教育長 竹井 千庫 <b>岡山県教育庁</b> 教育次長 内田 広之 <b>文化財課</b> 課長 山田 寛人 参事 横山 定 総括副参事（埋蔵文化財班長） 大橋 雅也 主幹 物部 茂樹 主任 岡崎 行康 <b>古代吉備文化財センター</b> 所長 宇垣 匡雅 調査協力者 佐伯 純也（（一財）米子市文化財団埋蔵文化財調査室）・中森 祥（鳥取県教育委員会）・ 前原 茂雄（蒜山郷土博物館）・森 俊弘（真庭市教育委員会）	次 長（総務課長事務取扱） 成本 俊治 参 事（文化財保護担当） 光永 真一 <b>〈総務課〉</b> 課長事務取扱 成本 俊治 総括主幹（総務班長） 金藤 賢史 主 任 宮岡 佳子・山内 基寛 <b>〈調査第二課〉</b> 課 長 高田恭一郎 総括副参事（第一班長） 氏平 昭則（調査・整理担当） 主 任 石田 為成（調査担当）
---	--

### 4 日誌抄

平成27年 10月1日(木) 事業開始。 10月7日(水) 資材搬入、発掘調査開始。 10月9日(金) 重機による掘削作業。 10月29日(木) 塚1南石塔集積検出状況写真撮影。 11月19日(木) 専門委員視察。 11月20日(金) 塚1墳丘検出状況、東斜面石塔出土状況写真撮影。 11月25日(水) 重機による掘削・排土移動作業。 下段部分調査終了。 11月26日(木) 重機による掘削・排土移動作業。 中段部分調査終了。	11月30日(月) 重機による中・下段部分埋め戻し作業。 12月2日(水) 塚1墳丘東西断面写真撮影・実測。 12月9日(水) 完掘状況写真撮影・実測。 12月14日(月) 上段部分調査終了。 12月15日(火) 資材撤収、発掘調査終了。 平成28年 1月4日(月) 整理作業開始。遺物復元・実測、遺構・遺物浄書に着手。 2月2日(火) 遺物写真撮影に着手。 2月15日(月) 割付作成作業に着手。 3月1日(火) 文章執筆に着手。 3月31日(木) 報告書作成作業終了。
---	--

表1 文化財保護法に基づく提出書類一覧

#### 埋蔵文化財発掘の通知（法第94条）

番号	岡山県文書番号 勧告等の日付	遺跡の名称 時代・種類	所在地	面積 (㎡)	目的	通知者	通知日	主な勧告事項
1	教文理第252号 平成27年5月11日	初和古墓 中世 その他の墓	真庭市蒜山初和479-1ほか	249,000	道路	岡山県美作県民局 局長 村木正司	平成27年5月1日	発掘調査

#### 埋蔵文化財発掘調査の報告（法第99条）

番号	文書番号 日付	遺跡の名称 時代・種類	所在地	面積 (㎡)	原因	調査を行った 地方公共団体	調査期間
1	岡吉調第55号 平成27年10月9日	初和古墓 中世 その他の墓	真庭市蒜山初和479-1ほか	420	道路	岡山県	平成27年10月7日～ 平成27年12月15日

#### 埋蔵文化財発見の通知（法第100条）

番号	文書番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
1	教文理第1208号 平成27年12月15日	土師器、陶磁器、 宝篋印塔、五輪塔 計10箱	真庭市蒜山初和479-1ほか 初和古墓 中世 其他 の墓	平成27年10月7日～ 平成27年12月15日	岡山県教育委員会 教育長 竹井千庫	岡山県知事 伊原木隆太	岡山県古代吉備 文化財センター

## 第2章 調査の成果

### 第1節 塚

#### 調査前の様子（第3・4図、巻頭図版1・2）

上段は塚状の高まりが位置する面とその西側で少し低い平坦面の2段に分かれ、全体が竹藪となっていた。塚状の高まり西斜面には大木が1本立ち、東側に用途不明で一辺1.5mを測る方形のコンクリート台が作られていた。塚状の高まりの南側には、宝篋印塔相輪S1の宝珠のみ・五輪塔火輪S76・宝篋印塔笠S2・同塔身S3・同基礎S4が組み合わされて立っていたほか、五輪塔部材を主にした石塔の集積があった（南集積1）。さらに、路線外となる南の平坦面にも散漫ではあるが2か所の石塔の集積が存在した（南集積2・3）。南集積2・3の周囲には近世の竿墓と自然石転用の石塔があり、寛政3（1791）・10（1798）年、天保8（1837）年などの銘を確認できる。旧地権者の話として、縁のある墓石はすでに移転しているとのことであった。

中段と下段は雑木林となっていた。旧地権者によると、中段は以前畑地であったとのことである。

#### 調査状況と基本土層（第4・5・9図）

調査の結果、2基の塚を確認した。それまで塚状の高まりとしていたものを塚1、その北西に隣接するものを塚2と呼称する。塚1・2周辺は近世～現代の攪乱により、地形が大幅に改変されている。A断面に示すように、攪乱は地山面まで及ぶものがある。塚1東側では攪乱の下で土坑状の掘り込みを2か所確認した。そのうち西側の掘り込みには五輪塔の火・地輪を含む集石が伴う。塚1西側では調査区南北端に現代の攪乱が及び、その深さは北側で地表から最大1.15mを測る。北側の攪乱は地山面より下まで達して塚2と土坑2の一部を削っている。塚1・2周辺の表土・包含層から染付（大皿、碗類、蛇の目釉剥ぎ青磁など）、陶器（灯明皿、徳利）の他、現代のガラス瓶が出土した。19世紀前半を示す染付碗があるが、前述の竿墓の年号より古い遺物は確認できなかった。

塚1西側の平坦面と中段へ続く斜面では、まずトレンチを掘削し土層堆積の状況を観察した。その結果、厚さ最大60cmの近現代と近世の造成土を確認した。造成土下では、純粋な黒ボク層が厚さ50cm前後で調査区南西側へ向かって厚くなるように堆積していた。遺物は、B断面第3層の近世造成土中から出土した備前焼の灯明皿片のみである。

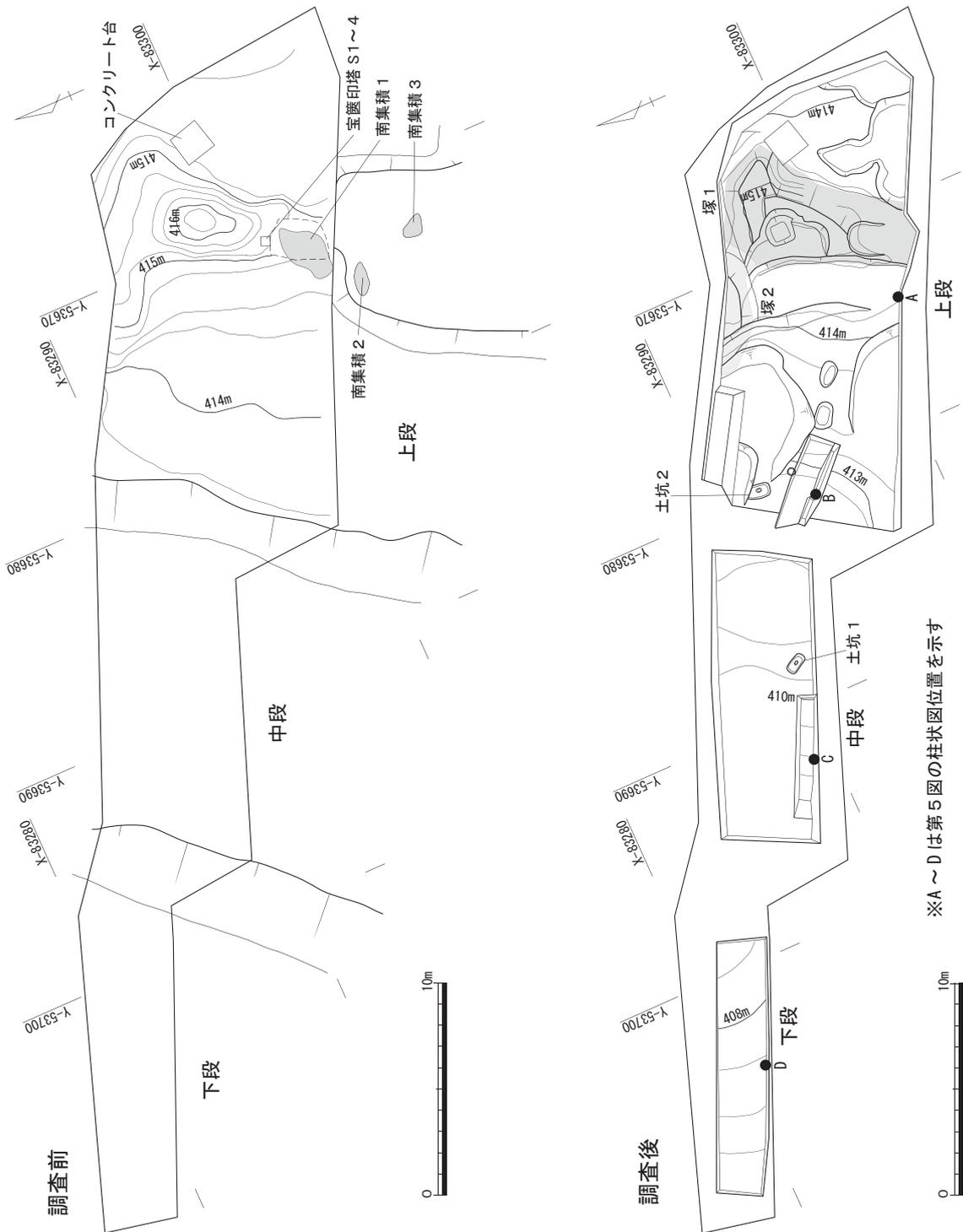
中段は、一部に現代の攪乱が及んでいたが、全面で黒ボク層を確認した。同層は、厚さ35～80cmで南西側へ堆積が厚くなる（C断面）。中段では遺物は出土せず、黒ボク層以下は自然堆積と解釈した。なお、調査区西隅の黄色土上面で土坑1を検出している。

下段の黒ボク・漸移層は現代の削平で消失していたが、地形測量では南西側が低い傾向にある。

#### 塚1周辺石塔集積（第4・6・7図、巻頭図版2、図版1）

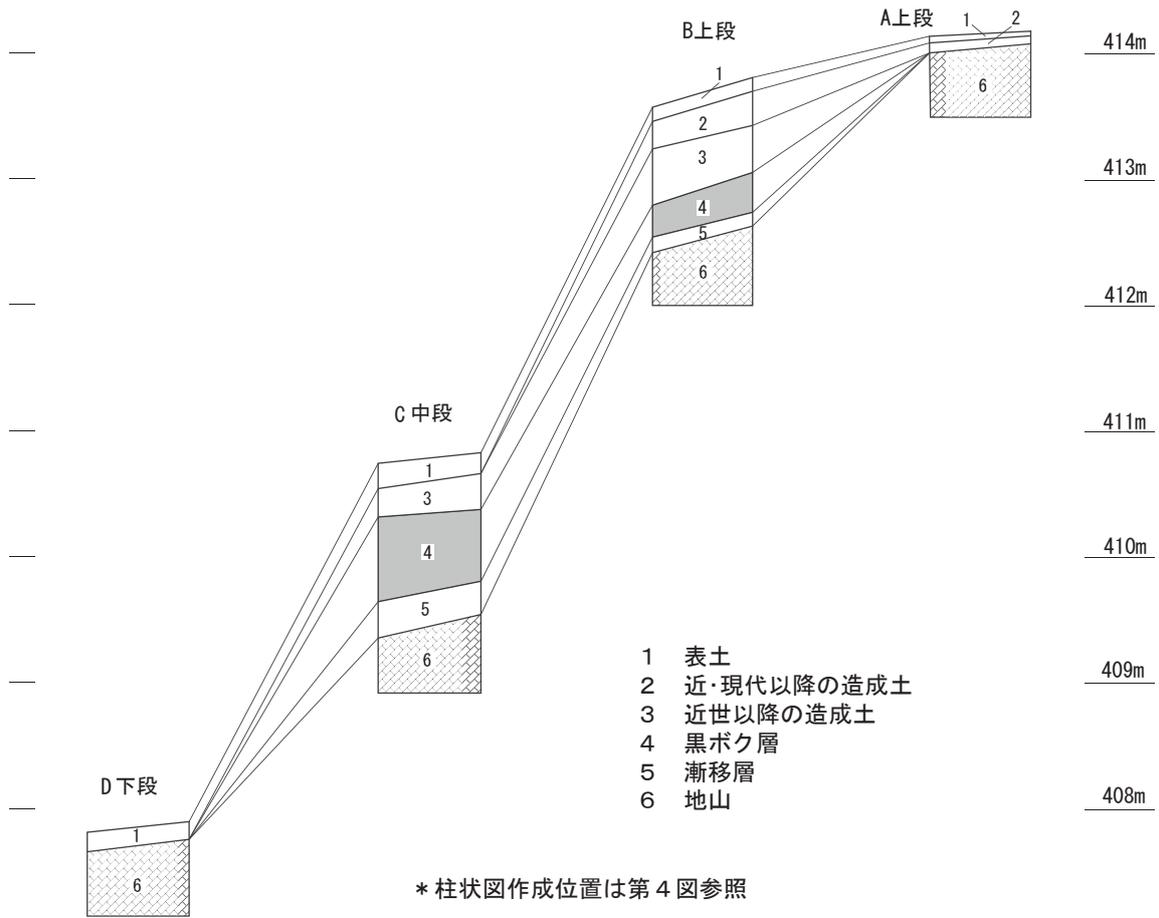
塚1周辺には、調査前から露出していた南側の石塔集積3か所（南集積1～3）と、包含層除去後に検出した東側の集積2か所（東集積1・2）がある。南集積1は宝篋印塔と、その南側の石塔の集積である。内容は宝篋印塔がS1～4と相輪S5、五輪塔が空風輪18、火輪23、水輪18、地輪37点を

数える。宝篋印塔の基壇をなす自然石の石敷きは、出土品と土層観察から現代に築造され、集積も現代に行われたことが判明した（塚1南北断面第2～5層）。ただし、最も深い部分の掘り込み（第6・7層）は出土した少量の陶磁器から近世に掘削された可能性が高い。南集積1に比べ、南集積2・3は散漫な配置を示す。南集積2には宝篋印塔の笠S7、塔身S8、基礎S9と五輪塔の空風輪1点、火輪1点と水・地輪1点が見られ、南集積3には宝篋印塔の相輪S6と五輪塔の火輪3点、水輪4点、水・地輪S23があった。

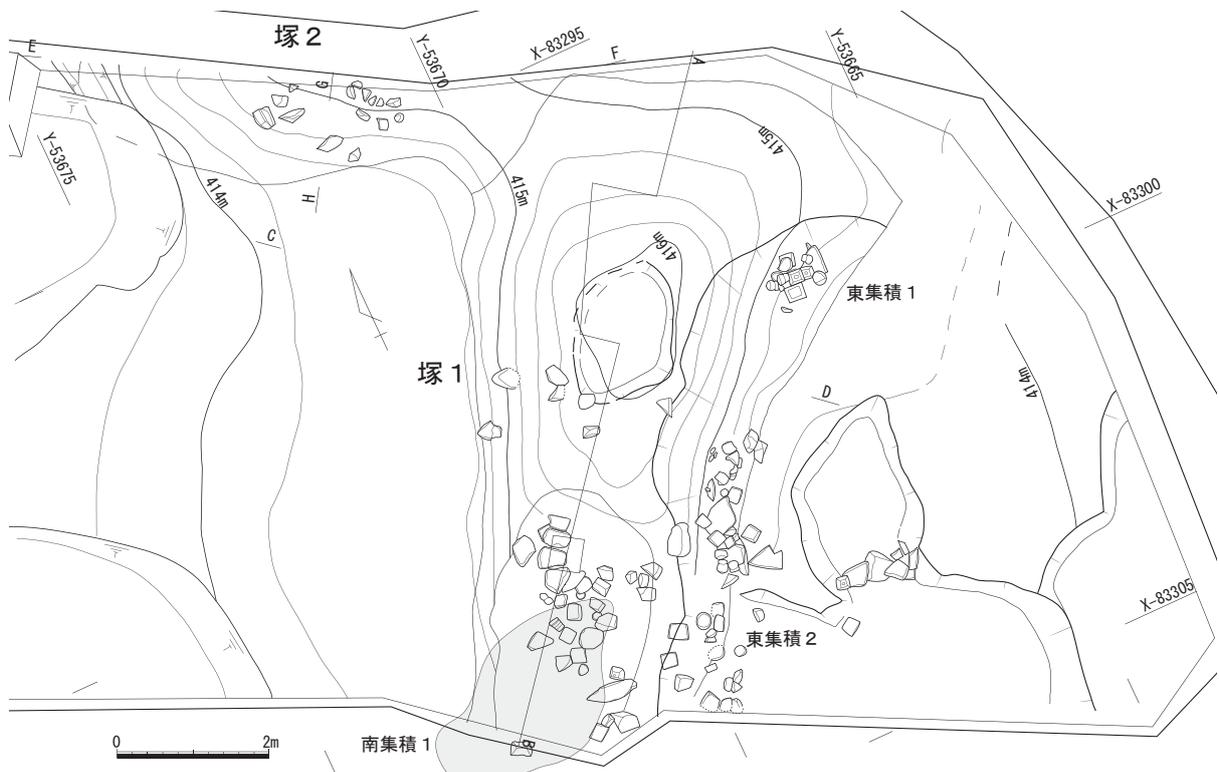


第4図 調査区全体図 (1/300)

※A～Dは第5図の柱状図位置を示す



第5図 基本土層柱状模式図 (垂直1/60)

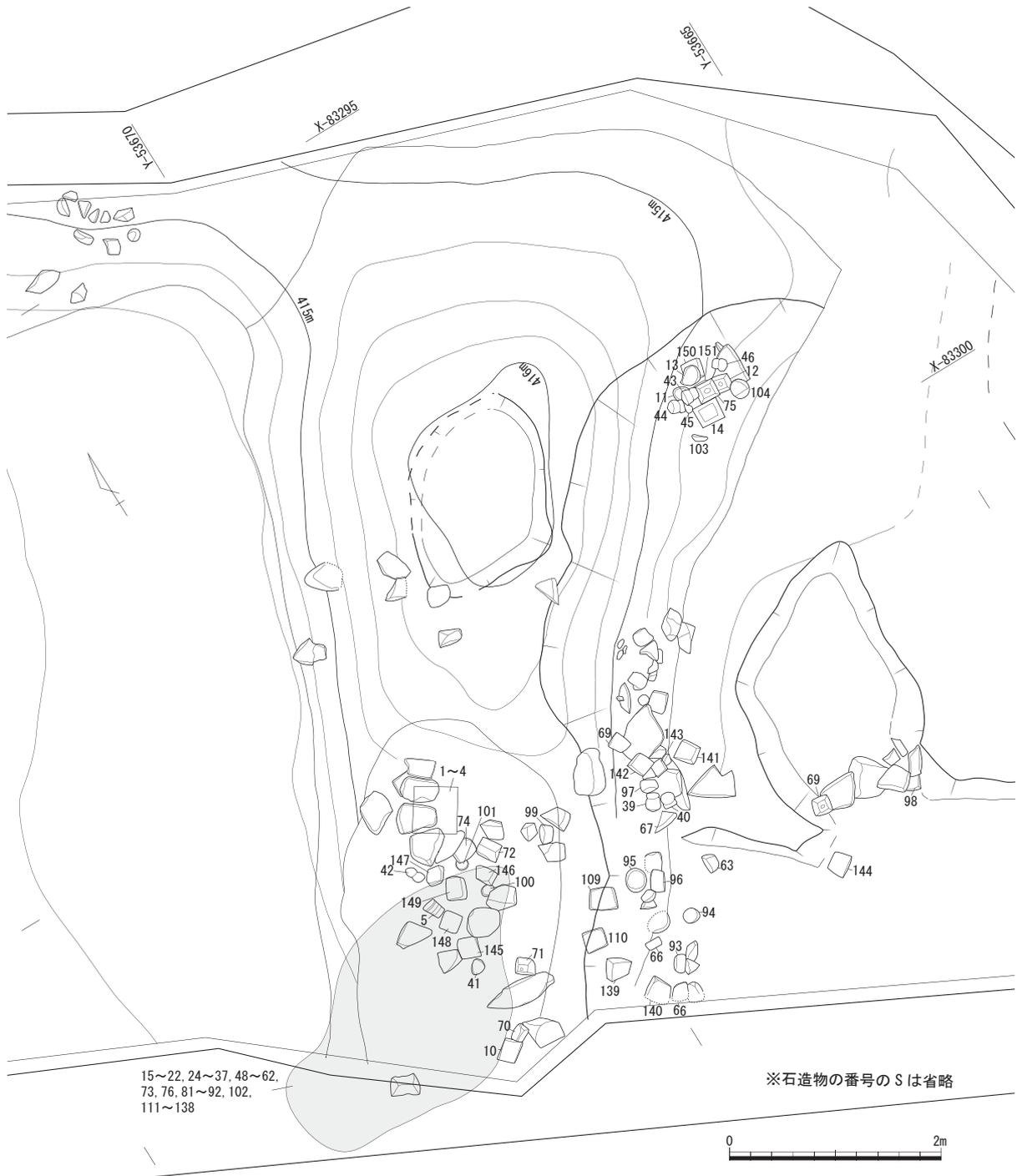


第6図 塚1・2墳丘 (1/100)

東集積1・2は、塚1東斜面を切り崩した加工段内に位置する。北側の東集積1では、五輪塔の空風輪5点、火輪2点、水輪3点、地輪3点が密集する。設置していたものが倒壊したと考えられるが、部位数がまちまちであることから、原位置を移動しているかもしれない。南側に位置する東集積2では、五輪塔の空風輪3点、火輪7点、水輪6点、地輪6点が南北4mの間に帯状に分布する。30～50cm大の平たい自然石を掘り方に接して配置している部分があり、これらを台石にして五輪塔が建っていた可能性がある。東集積1・2の下には遺物・遺構は存在しなかった。

塚1墳丘（第8図、巻頭図版2、図版1）

墳丘構築の前に塚1下土坑とその西側に南北4m以上、東西1.5mの平坦面を掘削する。平坦面東側

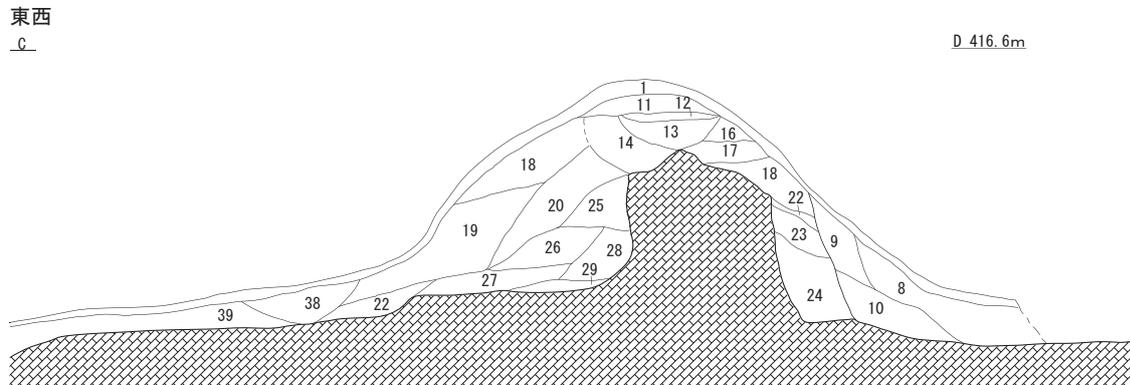
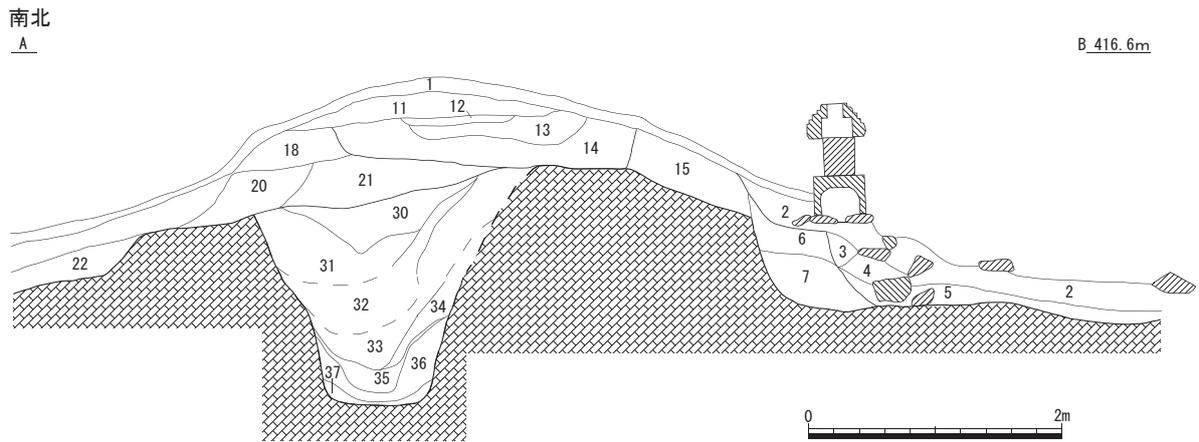


第2章 調査の成果

は地山削り残しで、その範囲は長さ4.5m、幅0.5~1.5m、高さは1~1.3mを測る。盛土は地山加工後に行われ、主に黒色・黒褐色土だが、南側一部ではにぶい黄褐色土と黒色・黒褐色土が互い違いに入る部分もあった。東側集積1・2に伴う掘り込みは東西（C-D）断面で東側の第8~10層である。西側は第8回西側の38・39層が現代の畑の加工段に伴う土層である。この加工段は墳丘盛土を一部削るが、見た目の墳端より西側に位置していることから、西墳端は当初の形状であると判断できる。

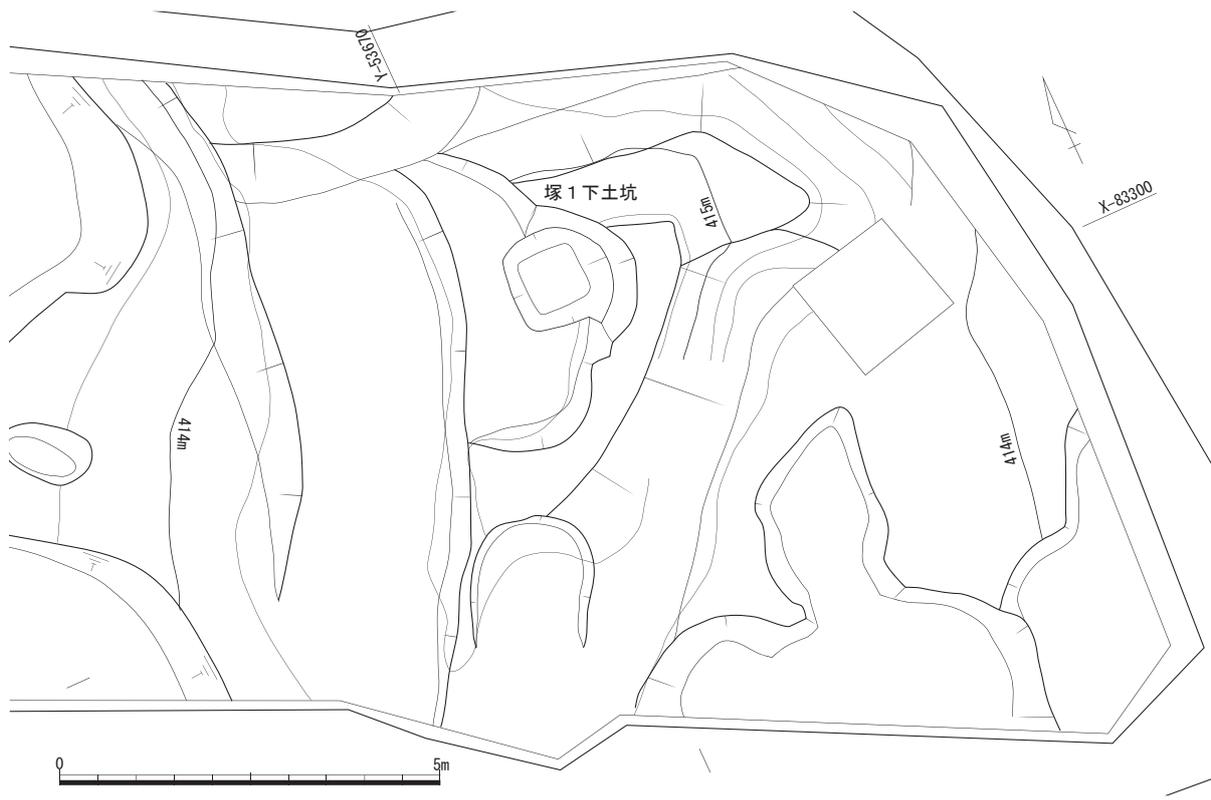
なお、断面土層観察中、盛土頂部で第12・13層からなる土坑を認識した。平面形は楕円形で2×1.4m、深さ0.2mを測る。掘り方内に30cm大の石を数点確認したが遺物は出土しなかった。

また、塚1の北端では地山の直線的加工を確認し、墳端と認識した。結果を総合すると、塚1の形



- |   |                     |   |
|---|---------------------|---|
| 1 黒褐色(10YR2/1)土(表土)                       | 14 黒褐色(10YR3/1)土    | 28 にぶい黄褐色(10YR6/4)土                     |
| 2 褐灰色(10YR5/1)土(現代攪乱土)                    | 15 にぶい黄褐色(10YR6/4)土 | 29 灰黄褐色(10YR5/2)土                       |
| 3 にぶい黄褐色(10YR6/4)土(現代攪乱土)                 | 16 黒褐色(10YR3/1)土    | 30 黒褐色(10YR3/1)土                        |
| 4 褐灰色(10YR4/1)土(現代攪乱土)                    | 17 灰黄褐色(10YR5/2)土   | 31 褐灰色(10YR5/1)土                        |
| 5 褐灰色(10YR5/1)土(現代攪乱土)                    | 18 黒褐色(10YR3/1)土    | 32 褐灰色(10YR5/1)土と<br>明黄褐色(10YR7/6)土の混ざり |
| 6 灰黄褐色(10YR5/2)土(近世攪乱土)                   | 19 黒色(7.5YR2/1)土    | 33 褐灰色(10YR4/1)土                        |
| 7 にぶい黄褐色(10YR5/2)土(近世堆積土)                 | 20 黒褐色(10YR3/2)土    | 34 にぶい黄褐色(10YR6/4)土                     |
| 8 灰黄褐色(10YR4/2)土(近世堆積土)                   | 21 黒色(10YR2/1)土     | 35 黒色(10YR2/1)土                         |
| 9 黒褐色(10YR3/1)土                           | 22 黒褐色(10YR3/1)土    | 36 にぶい黄褐色(10YR5/4)土                     |
| 10 にぶい黄褐色(10YR5/4)土                       | 23 黒褐色(10YR3/2)土    | 37 暗灰黄色(2.5Y4/2)土                       |
| 11 黒褐色(7.5YR3/1)土                         | 24 にぶい黄褐色(10YR5/3)土 | 38 灰黄褐色(10YR4/2)土                       |
| 12 明黄褐色(10YR7/6)土                         | 25 黒褐色(10YR3/1)土    | 39 黒褐色(10YR3/1)土                        |
| 13 黒褐色(10YR3/1)土と<br>にぶい黄褐色(10YR6/4)土の混ざり | 26 黒褐色(10YR3/1)土    |   |
|   | 27 黒褐色(10YR3/2)土    |   |

第8図 塚1断面図(1/60)



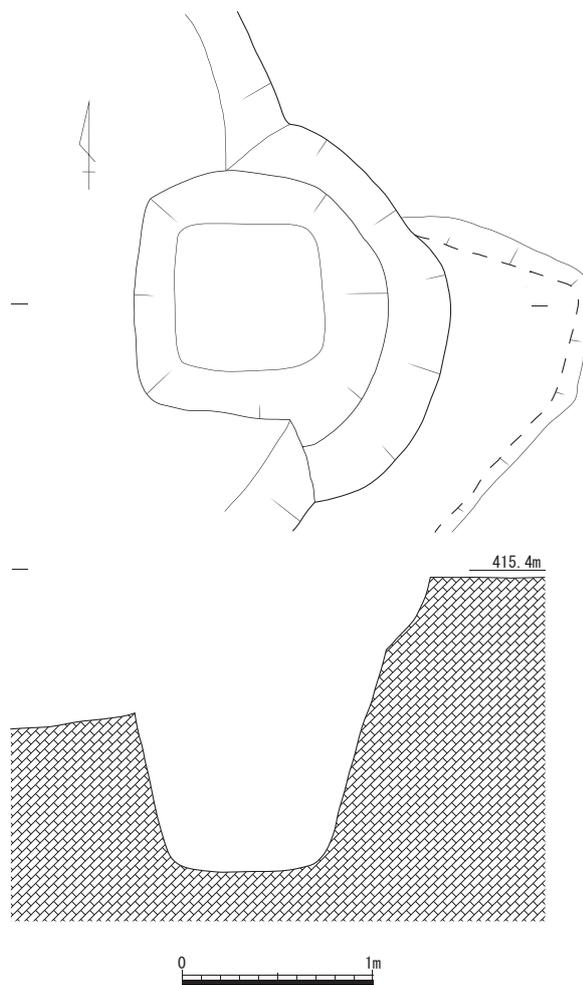
第9図 塚1下完掘状況 (1/100)

状は方形で、規模は最大残存長6.2m、最大残存幅5.5m、高さ1.9mを測る。

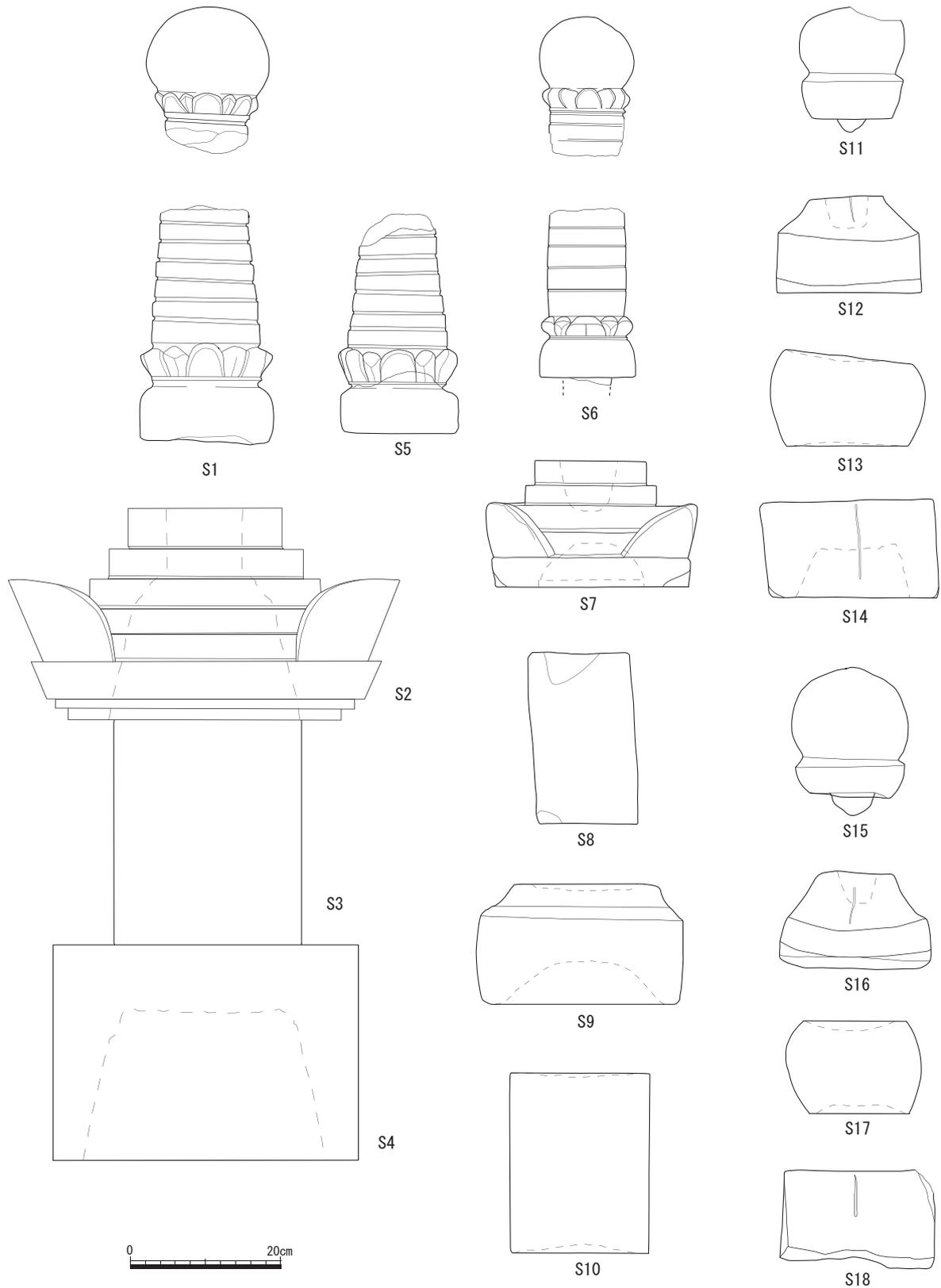
塚1下土坑 (第10図、図版2)

塚1盛土除去中に検出した。埋土は灰褐色土 (第8図第31層)、褐灰色土に地山由来の黄褐色土が混ざる土 (同第32~34層)、均質な黒色土の堆積 (同第35層)、初期埋土 (同第36・37層) からなる。第34層が最も地山の黄褐色土に近く、第31~33・36・37層はそれより褐灰色土の割合が多い。塚1の盛土に土坑の掘り方の立ち上がりが観察できなかったため、土坑が埋没してから塚1の盛土が施されたと解釈できる。また、第35層は水性堆積と考えられるので、一時的に土坑が開口していた可能性がある。平面形状はほぼ正方形、掘り方は上面で167×200cm、底面で78cm四方、深さは東側から156cmを測り、各辺はほぼ東西南北を指向している。遺物は出土せず、平面で木棺痕跡の様な土層の変化は観察できなかった。

(氏平)



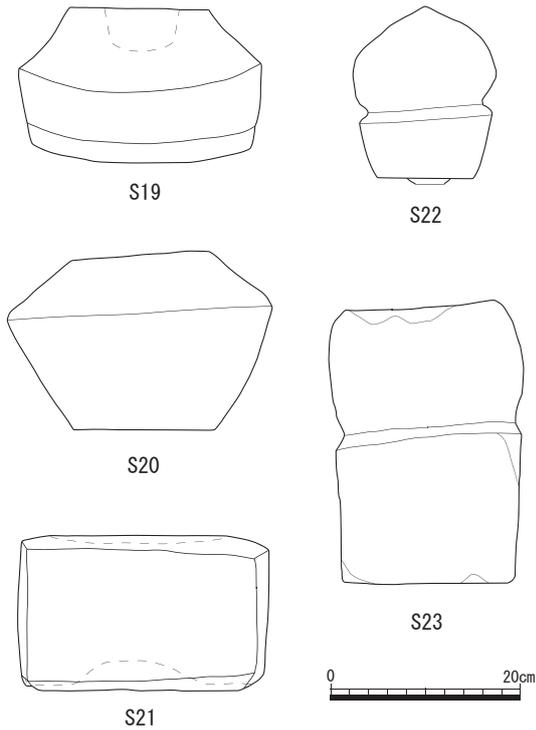
第10図 塚1下土坑 (1/40)



第11図 塚1周辺出土石塔1 (1/8)

石塔 (第11・12図、図版4)

石塔は宝篋印塔、組合せ式五輪塔、一石五輪塔を確認した。これらは塚1の南及び東側で検出しているが、塚1築造後の江戸時代から現代にかけて設置あるいは集積されたもので原位置を保っている

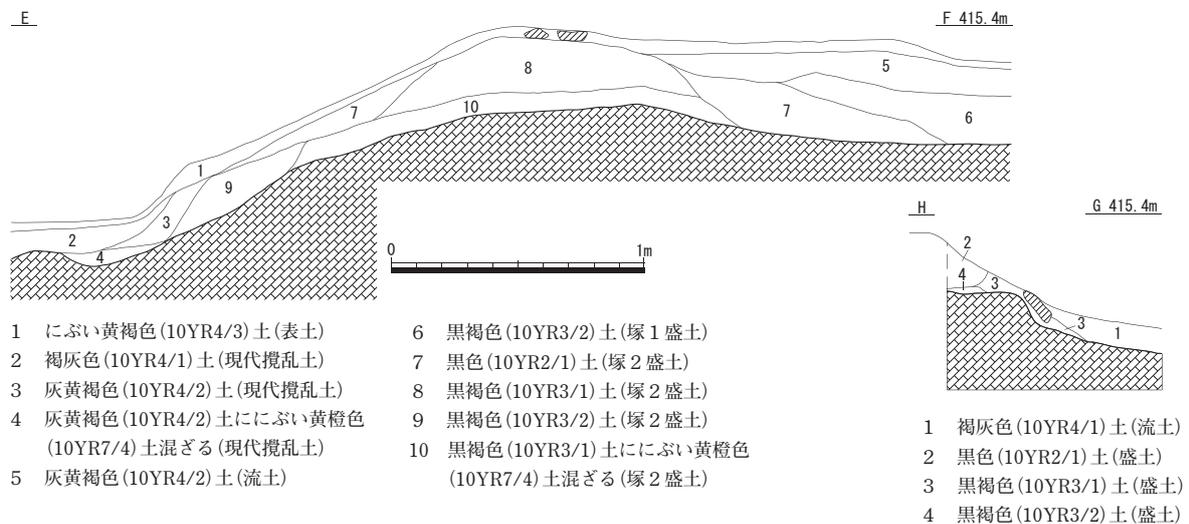


第12図 塚1周辺出土石塔2 (1/8)

ものはない。各部位の出土点数から推定される石塔の数は、宝篋印塔3基以上、組合せ式五輪塔46基以上、一石五輪塔2基である。組合せ式五輪塔については空風輪27点、火輪36点、水輪31点、地輪46点を確認しており、部位別の計測値と出土位置等を表2にまとめ、一部を図示した。石材については宝篋印塔、一石五輪塔及び組合せ式五輪塔の大部分が石英安山岩質凝灰岩で、S19~21のみ安山岩である。

S1~4は一基の宝篋印塔と考えられ、調査時には、現代に造作された塚1墳丘南側の基壇上に配置されていた。相輪S1の宝珠は球形で、下部の請花と伏鉢の間に1条の突帯が巡る。笠部S2は最大幅52cm、高さ28.5cmと大形で、内部は納入孔として大きくくり抜かれている。段形は軒上5段、軒下2段で、軒端部は斜めに切られており、隅飾り突起は素面で大きく外傾する。塔身S3は直方体で素面、基礎S4は段形を伴わず素面で内部は大きくくり抜

かれている。遺存部の総高は140cmで、本来は150cm程度の規模と推定される。S6~9は南集積2・3で確認した1基の宝篋印塔と考えられるもので、相輪S6の九輪は沈線で細線化しており新しい様相をもつ。笠部S7は最大幅28cm、高さ17cm。段形は軒上4段のみで、隅飾り突起は素面でわずかに外傾している。基礎S9は上に1段の段形を作り出している。S5は宝篋印塔の相輪、S10は塔身である。S11~22は組合せ式五輪塔でS11~14は東集積1、S15~18は南集積1で確認されており、組合せを推定し図示した。空風輪は球形に近いS15と上部が突出するS22がある。火輪は軒が厚く反りの小さいS12と軒が薄く反りの大きいS16が認められる。水輪S13・17はともに扁平で、最大径が中央よりやや上位にある。地輪S14・18の側面は横長の長方形になる。また、組合せ時の目印としてかS12・14・16・18のように線刻が認められるものがある。S19~21は1基の五輪塔と考えられるが空風



第13図 塚2断面図 (1/60)

輪を欠く。水輪S20は算盤玉状を呈するなど新しい様相をもち、石材も他の石塔と異なる。S23は南集積3で確認した一石五輪塔で、水輪と地輪が一石で表現され別作りの空風輪及び火輪部を欠く。これらの石塔の時期は、その形態や大きさなどから16世紀～17世紀初頭に収まるものであろう。(石田)

塚2 (第6・13図、巻頭図版1、図版1)

塚1の北西に隣接して位置する。北の国道側部分については大きく削平されており、全体の様相については不明であるが、北西-南東方向に長軸をもち、塚1と同様に長方形を呈していた可能性が高い。規模は残存長で4.5×1.6m、高さ0.7mを測る。塚1と同様に地山を削り出して整形した後、黒色・黒褐色土による盛土を施している。また、20～30cm程度の角礫が頂部付近から南斜面にかけて密ではないが散布していた。塚1との関係については、塚2の盛土上に塚1の盛土が施されていることから、築造順は塚2が塚1に先行するが、塚の築成方法が共通する点や隣接して立地し、盛土が間層を含まず重なる状況などから両者の時期差はあまりないと考えられる。塚2に伴う遺物はなく、詳細な時期は不明であるが、隣接する塚1とほぼ同時期の築造と考えられる。(石田)

## 第2節 その他の遺構

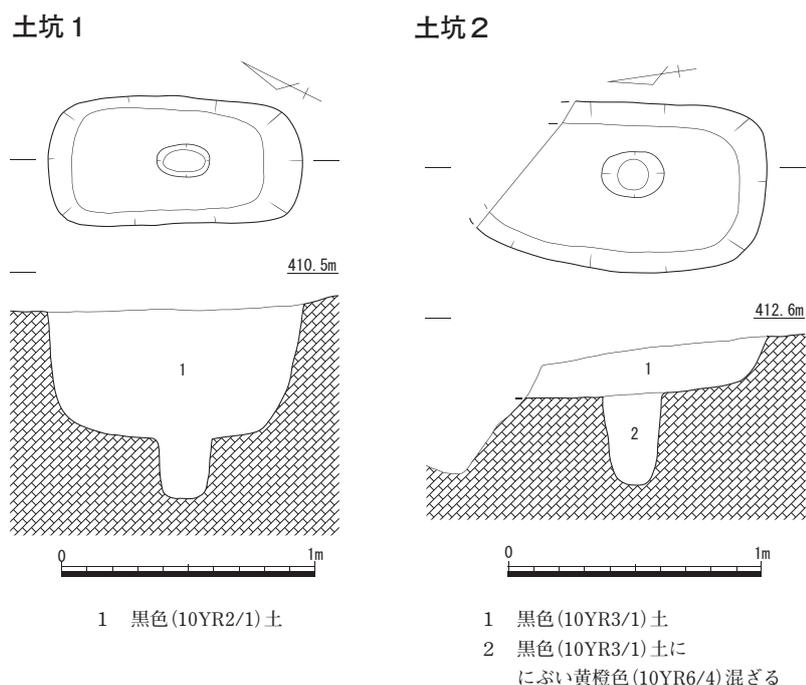
土坑1 (第4・12図、図版3)

中段中央南側に位置し、黒ボク・漸移層を除去後地山面で検出した。検出面では長さ100cm、幅51cmで、深さは穴まで含めて75cm、本体部分は52cmを測る。底面の長さは76cm、幅41cmであった。平面形は隅丸長方形を呈し、底面中央に楕円形の穴が1つある。穴の最大径は21cm、深さは23cmを測る。埋土は黒ボクで、遺物は出土しなかった。形状から縄文時代の落とし穴と考えられる。(氏平)

土坑2 (第4・12図、図版3)

上段北西端、土坑1の約8m東に位置する。現代の攪乱掘削中に検出し、攪乱で北端を切られる。

検出面での残存長107cm、幅67cmで、深さは穴まで含めて53cm、本体部分は17cmで、底面の残存長は98cm、幅50cmを測る。平面形は隅丸長方形を呈し、底面中央に楕円形の穴が1つある。穴の最大径は24cm、深さ36cmを測る。埋土は、本体部分が黒ボクで穴は地山土が混ざる。遺物は出土せず、土坑1と同様縄文時代の落とし穴であろう。(氏平)



第14図 土坑1・2 (1/30)

## 第3章 総括

### 第1節 中世の古墓について

今回の調査では、2基の塚の存在が明らかになった。塚1の形状は方形で、規模は最大残存長6.2m、最大残存幅5.5m、高さ1.9mを測る。北・西端は築造時の端が判明したが、南端は近世以降の五輪塔集積によって改変され、東側も近世以降には加工段で削られていた。盛土上に浅い楕円形の土坑を、盛土下に方形の塚1下土坑と平坦面を伴っている。もう1基の塚2の形状も方形であると思われ、最大残存長4.5m、最大残存幅1.6m、高さ0.7mである。集石を伴うが、詳細は不明である。

塚1に直接伴う遺物が出土していないことから、築造時期を判断するのは困難である。そこで本節では、築造及びその後の利用の変遷を復元し、近隣の類例と比較対照することで、塚1の性格やおおよその築造時期を考えてみたい。

まず、調査により明らかになった塚1の築造及びその後の利用の変遷を示す。

1. 塚1下土坑と平坦面を作成する（第9図1参照）。平坦面は南北4m以上、東西は1.5mで、東側に高く地山を削り残し、西方面に開いているように見える。土坑の位置は、平坦面の中央で東側下端と重なる所であり、平坦面の中央東奥を意識している。塚1下土坑からは遺物が出土せず、また土層観察で棺痕跡は認識できなかった。土層の中間に黒ボク由来と思われる黒色土（第8図第35層）が水性堆積であり流れ込みと判断できることから、一時期この層より上部が地上に露出し、土坑に関し何らかの行動をした後に再び埋めるといった行為があった可能性が考えられる。第35層の上には、地山由来の明黄褐色土が混ざる褐灰色土が土坑内全体に堆積する。

2. 黒褐色土を主体とする盛土を施し、方形の墳丘を構築する（第9図2参照）。盛土は塚1下土坑埋土上層の褐灰色土と明確に区別できる。黒ボク由来の黒色・黒褐色土と、若干淡い色調のにぶい黄褐色・灰黄褐色土を交互に重ねている。

続いて、塚上部に土坑を掘削する。この土坑は宝篋印塔S1～4設置のため掘削されたと想定されるが、確証はない。ここまでの過程で塚1がいったん完成する。

3. 東側に加工段が掘削される（第9図3参照）。加工段には台石と思われる石が配置され、五輪塔の各部材が散乱していたため五輪塔が建てられた可能性がある。五輪塔の個体数は東集積1で2～5基、東集積2で3～7基と数えられる。しかし、地輪が原位置を保った状態で確認できなかったので、出土した部材がこの場所で組み合わされて建っていたことを示す根拠はない。

4. さらに、南集積2・3と重なる位置に18世紀末～19世紀になって竿墓群が構築される。南側へは平坦面が広がるため、小規模の堂宇等の建築物があったことも考えられるが、推測の域を出ない。その後、南集積1～3で現代に至るまで石塔集積が行われる。

以上から塚1の特徴を簡単にまとめると、(1)方形の墳丘を持つ塚墓である、(2)盛土下に土葬墓かと思われる土坑が1基あるという点で、塚周辺に石塔を伴う可能性が高いとも言えるだろう。

鳥取・岡山県の中世墓をまとめた中森祥氏によると<sup>(1)</sup>、中世前期、岡山県内の津寺遺跡群、高塚遺

跡、久田原遺跡などでは屋敷墓が見られる。集団墓は室町～近世初頭の真庭市福田A遺跡のような短期間の造営と吉備中央町大村中世墓群のような長期間の造営がある。大村中世墓群では、火葬（集石・蔵骨器）は13世紀中葉から始まり14世紀初頭まで増加、土葬は14世紀後半から15世紀に増加、以降主流になっている。全体として中世後半までは火葬墓が多数だが近世初頭は土葬墓へ変わる。山陰では石積基壇と火葬骨と石造物が伴う傾向が強く、14世紀後半からセット関係があり、16世紀に消失する。岡山県内で石積基壇は少ない。塚墓は出雲東部から伯耆・因幡の山陰側が中心で美作でも見られる、といった流れである。

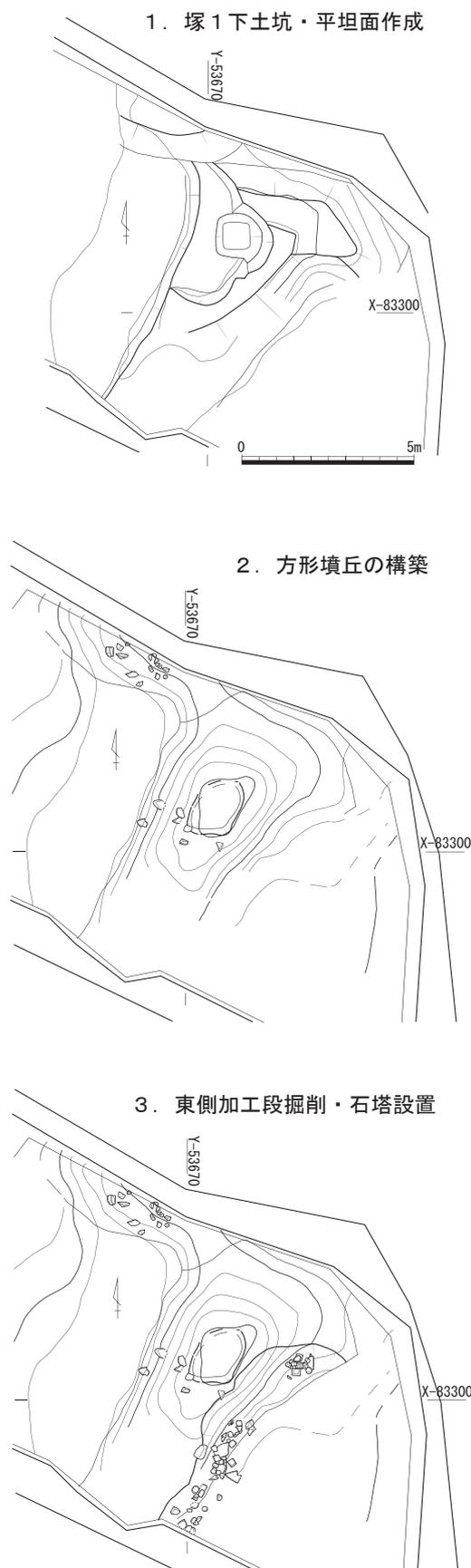
初和古墓は塚墓に当たるため、その類例と比較対照を試みる。

美作での例として、小池谷遺跡の塚<sup>(2)</sup>、茂平古墓<sup>(3)</sup>などがある。

小池谷遺跡の塚は全長9.8m、上段幅6.2m、下段幅4.7mの方形2段で盛土を施す塚墓で、上段に6か所に分かれる集石を伴う。上段の中央付近に最大の埋葬施設があり、炭・焼骨片とともに円筒形の瓦質土器と開元通宝が出土した。集石の間に蔵骨器や骨片、集石の下に火葬骨を取めた埋葬施設があり、埋葬施設の中には備前焼の蔵骨器を取めたものがある。備前焼の蔵骨器から15世紀、室町時代にあたる。塚築造の発端として中央に土坑を掘削している点は初和古墓と類似するが、五輪塔が非常に少なく、蔵骨器が存在する点が異なる。

茂平古墓は1辺約12m、幅2mの方形の周溝の内側に高さ約1mの墳丘を構築し、墳丘頂部近くに方形の石列が巡る。塚中央に土坑を掘削し備前焼の甕が1基埋設され、時期は鎌倉末～室町時代である。石塔類が見られないなど初和古墓と異なる点が多い。

山陰側では、鳥取県北栄町の妻波古墓<sup>(4)</sup>が有名である。方形墳丘を2段階にわたり拡張し、第Ⅰ期は墳丘のみ、第Ⅱ期は墳丘と遺物が出土していない土坑1基、第Ⅲ期は盛土の拡張に五輪塔多数・集石・火葬骨（集団墓）を伴い、時期は16世紀中葉～後半



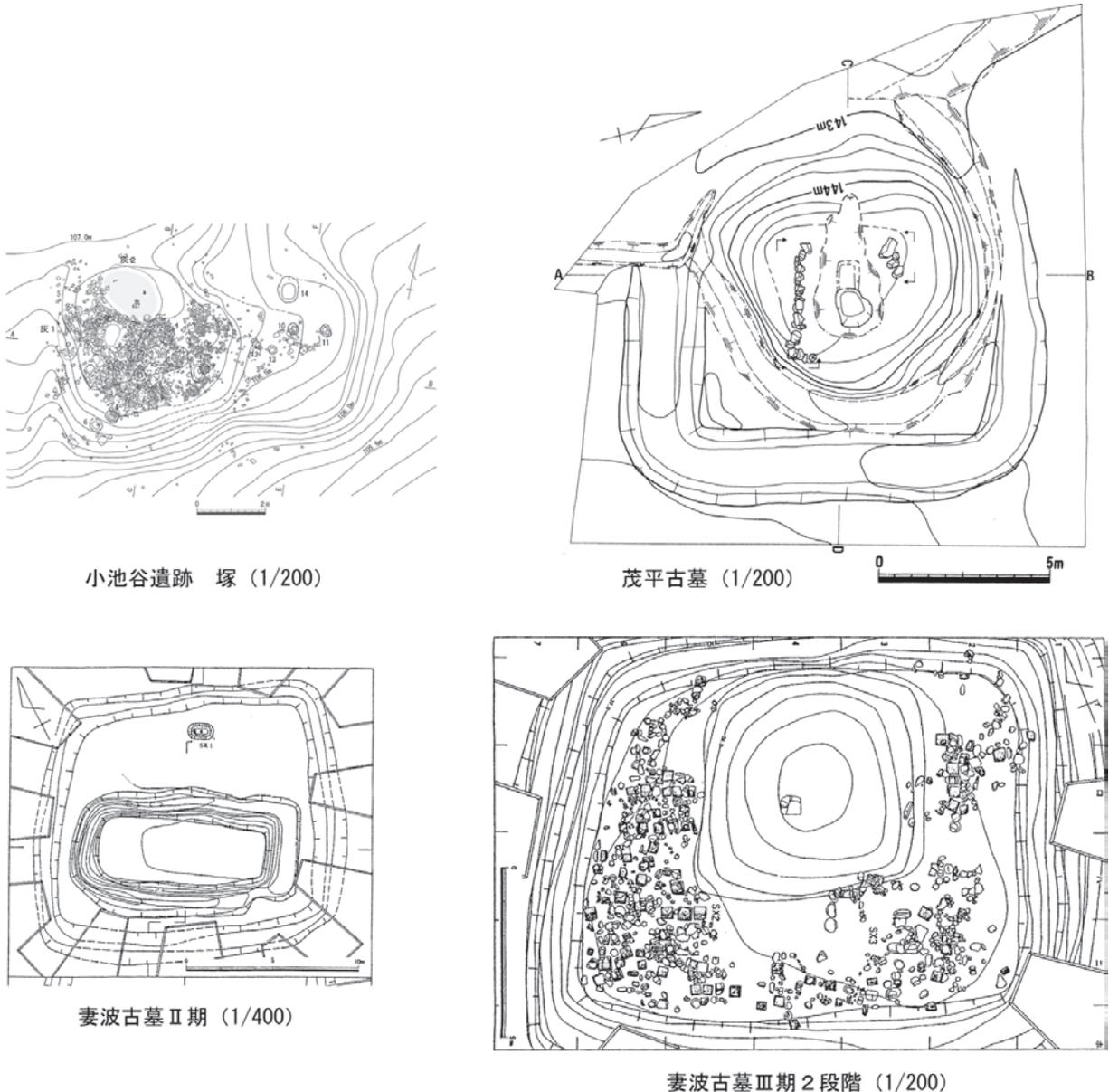
第15図 初和古墓塚1変遷図 (1/200)

で、特定有力者個人墓から同族・構成員の集団墓へ移行すると解釈されている。

妻波古墓は遺物の出土しない方形の土坑、方形の墳丘、石塔を多数伴うなど、初和古墓と類似する点を挙げられる。特にⅡ～Ⅲ期は方形の土坑の上に墳丘を構築し、その後周囲に石塔の設置が行われるので、初和古墓の変遷と通じる点が多い。妻波古墓ほど明確にはできなかったが、塚1でも築造契機となる特定有力者個人墓から同族・構成員の集団墓への変遷があった可能性が考えられる。このことから、塚1も妻波古墓同様の16世紀後半の様相を示すものであろう。(氏平)

註

- (1) 中森 祥「東中国の中世墓」『日本の中世墓』高志書院 2009
- (2) 「大河内遺跡 及遺跡 小池谷遺跡 小池谷8号墳 小池谷B遺跡 上相遺跡 小中遺跡 小中古墳群 鍛冶屋途遺跡 鍛冶屋途古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』242 岡山県教育委員会 2016
- (3) 「西大沢古墳群 畑ノ平古墳群 虫尾遺跡 黒土中世墓 茂平古墓 茂平城」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』111 岡山県教育委員会 1996
- (4) 「妻波古墓—発掘調査報告書—」『大栄町文化財調査報告書』第21集 鳥取県大栄町教育委員会 1985



第16図 東中国の塚墓

## 第2節 石塔について

今回の調査では、塚1周辺に集積された宝篋印塔と多くの組合せ式五輪塔を確認した。塚1に直接伴う遺物の出土がなく、時期を判断する材料としても石塔の評価が必要なため、その特徴や年代的な位置付けについて形態や法量に注目して検討を行う。

### 宝篋印塔

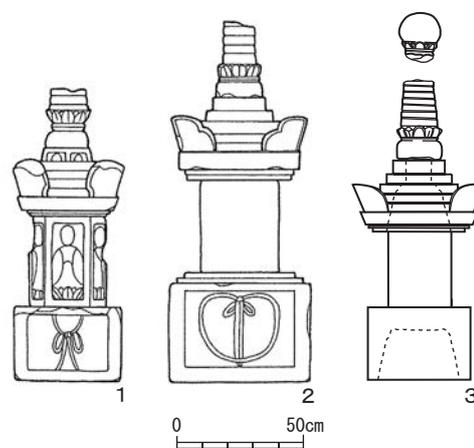
今回、確認した宝篋印塔の中で調査時に塚1南側に配置されていた宝篋印塔S1～4は、本来は塚1に伴っていた可能性がある。この宝篋印塔は、相輪下部の請花と伏鉢の間に巡る1条の突帯、笠部が軒上5段の段形で斜めに切られる軒端部、基礎に段形が無いなどの特徴をもつことやその石材<sup>(1)</sup>から、斉藤孝氏によって明らかにされた「蒜山式宝篋印塔」の一例として捉えられる<sup>(2)</sup>。蒜山式宝篋印塔は、斉藤氏の検討によって塔身が六角石幢になる六角石幢型（新見市神応寺塔<sup>(3)</sup>、真庭市道目木塔など）、塔身は一般的な直方体で基礎に水引き飾りをもつ蒜山系通常型（真庭市中井川塔、真庭市延助塔など）、古相でも笠部の隅飾り突起が外傾し、軒端部は垂直でなく斜めに切られ、基礎上面に段形が無いといった特徴をもつ蒜山固有型（真庭市倉尾塔など）などに分けられ<sup>(4)</sup>、それぞれの特徴や分布が示されている。また近年では、池上悟氏による実測調査及び考察があり<sup>(5)</sup>、特殊型式の石塔<sup>(6)</sup>であることや相輪の請花と伏鉢間に巡る1条の突帯、基礎の水引き飾りなどについて、隣接する鳥取県西部の伯耆地方との関連性が指摘されている。初和古墓の宝篋印塔は、斉藤氏の言う蒜山固有型の特徴を多く有する。年代については、池上氏が15世紀前半頃を想定する延助塔に比べ、笠部の隅飾り突起が外へ大きく開く形態や、塔身及び基礎は素面で全体的に簡略化するなど、さらに新しい様相をもつことから16世紀でも後半が想定される。蒜山式宝篋印塔の分布について、これまで確認されているものを中心に第18図に示した。六角石幢型のものは、既知の美咲町金堀塔、久米南町草木塔に加え、赤磐市西勢実塔・戸津野塔<sup>(7)</sup>のような類例もあり、旭川水系を軸として南北に広い範囲で分布が認められる。

初和古墓の宝篋印塔は、斉藤氏の言う蒜山固有型の特徴を多く有する。年代については、池上氏が15世紀前半頃を想定する延助塔に比べ、笠部の隅飾り突起が外へ大きく開く形態や、塔身及び基礎は素面で全体的に簡略化するなど、さらに新しい様相をもつことから16世紀でも後半が想定される。蒜山式宝篋印塔の分布について、これまで確認されているものを中心に第18図に示した。六角石幢型のものは、既知の美咲町金堀塔、久米南町草木塔に加え、赤磐市西勢実塔・戸津野塔<sup>(7)</sup>のような類例もあり、旭川水系を軸として南北に広い範囲で分布が認められる。

初和古墓の宝篋印塔は、斉藤氏の言う蒜山固有型の特徴を多く有する。年代については、池上氏が15世紀前半頃を想定する延助塔に比べ、笠部の隅飾り突起が外へ大きく開く形態や、塔身及び基礎は素面で全体的に簡略化するなど、さらに新しい様相をもつことから16世紀でも後半が想定される。蒜山式宝篋印塔の分布について、これまで確認されているものを中心に第18図に示した。六角石幢型のものは、既知の美咲町金堀塔、久米南町草木塔に加え、赤磐市西勢実塔・戸津野塔<sup>(7)</sup>のような類例もあり、旭川水系を軸として南北に広い範囲で分布が認められる。

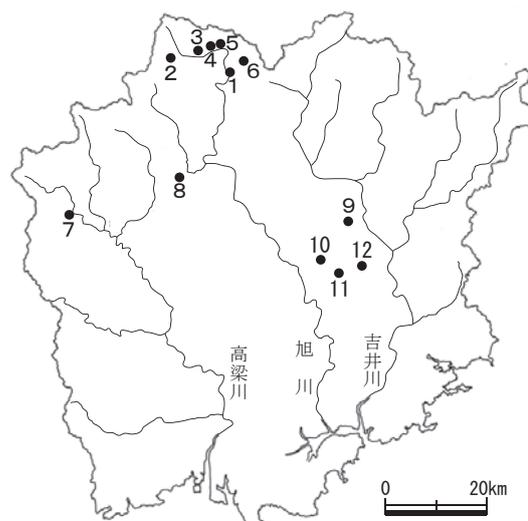
### 五輪塔

確認された組合せ式五輪塔の法量を分析するため、部位別の計測値をもとにグラフ化して第19図に示した<sup>(8)</sup>。空風輪は高さ17.0～21.6cm、幅13.5～16.2cmの



1 神応寺塔 2 延助塔 3 初和古墓  
(1・2は註5文献から転載)

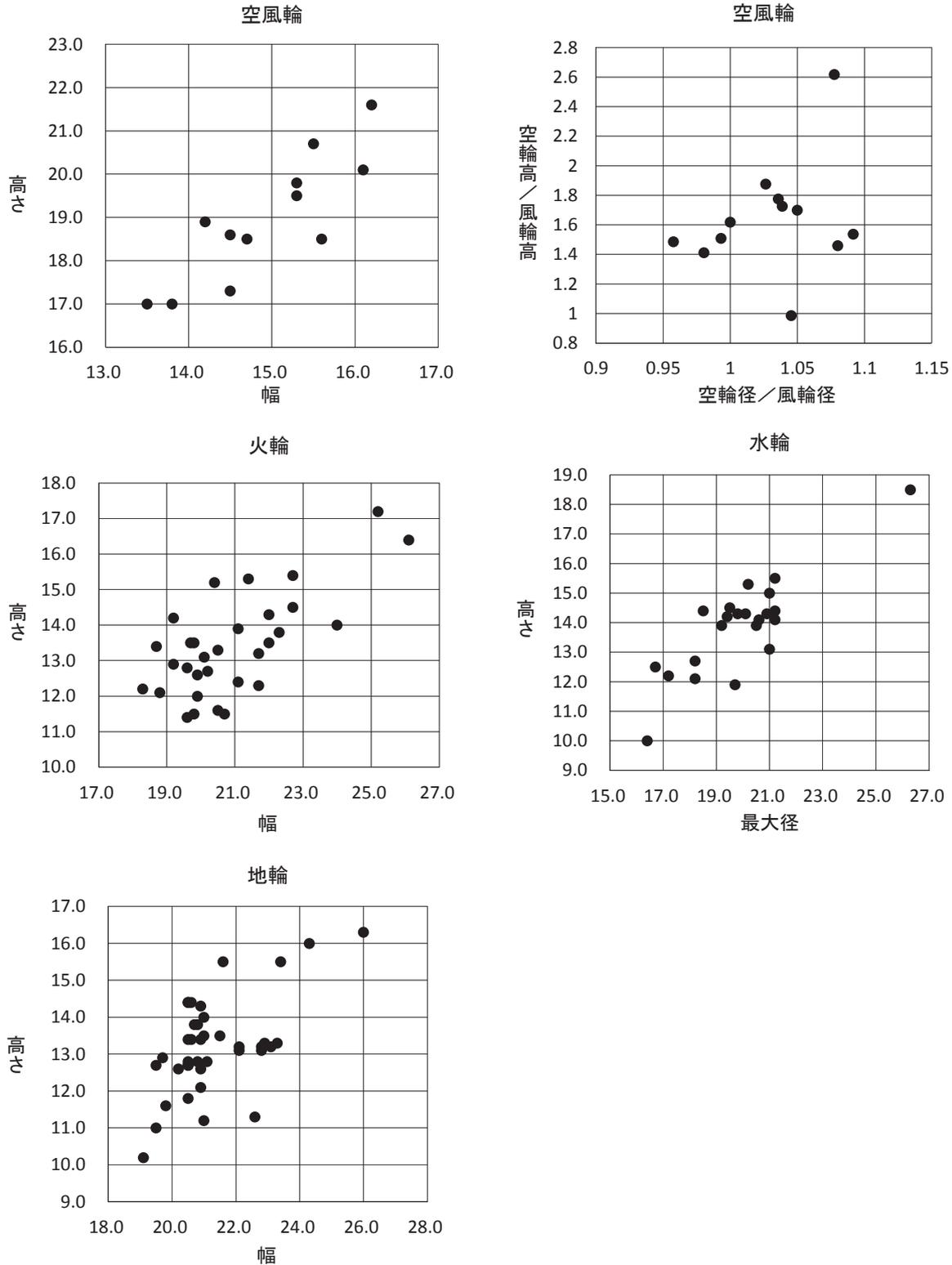
第17図 蒜山式宝篋印塔実測図 (1/30)



1 初和古墓 2 延助塔 3 中井川塔 4 飯守塔  
5 道目木塔 6 本興寺塔 7 神応寺塔 8 倉尾塔  
9 金堀塔 10 草木塔 11 西勢実塔 12 戸津野塔

第18図 蒜山式宝篋印塔分布図 (1/1,500,000)

間にまとまる。空輪と風輪の径及び高さの比率を比較したところ、空輪径：風輪径は0.96～1.09：1の間に集まり径はほぼ同じだが、空輪高：風輪高は1.41～1.88：1の間に集中することから、重心を空輪にしているものが多数を占めることがわかる。火輪は高さ11.4～15.4cm、幅18.3～22.7cmの間にまとまりがある。水輪は高さ11.9～15.5cm、最大径16.7～21.2cmに範囲に集中し、扁平な形態のものになる。地輪は高さ10.2～14.4cm、幅19.1～23.3cmの範囲にまとまり、形態は横長の直方体になる。蒜山



第19図 五輪塔部位別法量分布

地方において五輪塔の法量分析を行った事例は見られず比較する資料がないが、蒜山地方の五輪塔は伯耆地方との関連性が知られており<sup>(9)</sup>、安山岩系の石材を使用するなど共通点もある。伯耆地方の五輪塔については、中森祥氏が形態の変化がわかりやすい空風輪及び火輪の法量について分析を行い、時期が下るにつれ小型化していく傾向が明らかになっている<sup>(10)</sup>。16世紀代の鳥取県南部町福成早里遺跡<sup>(11)</sup>の五輪塔は、中森氏の分析によると空風輪が高さ20.5～24.5cm、幅15.0～17.5cm、火輪が高さ13.0～14.0cm、幅22.0～30.0cmの範囲に集中している。これらの成果を参考にすると、初和古墓のものは、福成早里遺跡よりさらに小型化した範囲に集中するので、16世紀でも後半に属するものが大半を占めると考えられる。なお、火・水・地輪で分布域が大きく外れる一群はS19～21などが該当するが、形態的にも明らかに新しい様相をもち、17世紀初頭に下る資料であろう。

#### まとめ

初和古墓で確認された宝篋印塔及び五輪塔の年代は、16世紀後半～17世紀初頭に収まり、ほとんどが16世紀後半のものと考えられる。これらの石塔に時期差はあまりなく、塚1の築造を契機として、その周辺において比較的短期間に造立されたものが、最終的に集積されたと考えられる。蒜山式宝篋印塔は初和古墓のように大型のものがよく見られるが、蒜山地方では大字（村）単位毎に存在している。多くの費用を要する大型宝篋印塔の造立者は、通常であれば有力領主層が想定されるが、蒜山地方においてはその分布数の多さから村落土豪層による造立が考えられる。また、五輪塔については小型化したものが大量に見られることから、有力農民層による造立が想定される<sup>(12)</sup>。 (石田)

#### 註

- (1) 初和古墓出土の宝篋印塔と五輪塔については、大部分が岩石学的には石英安山岩質凝灰岩との鑑定結果を得た。これまで安山岩とされてきた蒜山地方でよく見られる石塔や県内で確認されている蒜山式宝篋印塔の石材は、管見の限り初和古墓の石塔と同一のものである。
- (2) 齊藤 孝「仮称「蒜山式」宝篋印塔の存在」『網干善教先生華甲記念考古學論集』網干善教先生華甲記念会 1988
- (3) 新見市神応寺塔は蒜山式宝篋印塔で唯一、康応二（1390）年の紀年銘を塔身にもつ。
- (4) 相輪下部の請花と伏鉢の間に巡る1条の突帯や笠部の軒上5段の段形などは、蒜山式宝篋印塔に広く共通する特徴である。
- (5) 池上 悟「岡山県北部所在の中世石塔」『考古学論究』第16号 立正大学考古学会 2014
- (6) 伯耆地方においては宝篋印塔の塔身を宝塔に代える「赤碕塔」が知られている。  
川勝政太郎「赤碕塔」『考古学雑誌』第25巻第7号 考古学会 1935
- (7) 赤磐市教育委員会社会教育課「ふるさとの史跡探訪」46『広報あかいわ』平成21年2月号 2009
- (8) 五輪塔の各部位別の計測値の中で、高さや幅、最大径に欠損がないものを選択してグラフ化した。
- (9) 巖津政右衛門『岡山の石造美術』岡山文庫55 日本文教出版株式会社 1973  
蒜山文化財保護委員会『蒜山の文化財』第二集 石造物 蒜山教育事務組合教育委員会 1985
- (10) 中森 祥「出土した五輪塔について」『古市遺跡群3』鳥取県教育文化財団調査報告書78（財）鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター 2002
- (11) 北浦弘人ほか『福成早里遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書57（財）鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター 1998
- (12) 蒜山郷土博物館 前原茂雄氏、真庭市教育委員会 森俊弘氏の御教示による。

表2 五輪塔計測表

凡例

- ・石塔のうち、宝篋印塔S1～5とS6の宝珠、五輪塔S11～22は岡山県古代吉備文化財センターで保管し、それ以外は蒜山中福田の福王寺で保管している。
- ・計測位置は大村中世墓での計測位置に準拠しているが、大村中世墓の五輪塔と形状が異なる部分があり、計測を省略したところがある。各部位別の計測位置は24ページの略図に示した。  
「宮地遺跡 大木遺跡 大木古墳群 粧田山城跡 大村遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 113 岡山県教育委員会 1996年
- ・数値の単位はcmである。
- ・\*(17.2)のように\*( )で示した数値は概数である。
- ・石材は、A：石英安山岩質凝灰岩 B：安山岩である。宝篋印塔S2、五輪塔S11、S13、S19は岡山大学鈴木茂之教授による鑑定で、それ以外は調査員の判断による。
- ・出土地点は、南1=南集積1、東1=東集積1のように集積を略している。

空風輪

掲載番号	調査時番号	a	b	c	d	e	h	i	j	k	l	出土地点	石材	備考
S11	212	17.0	8.9	8.1	13.5	11.6	5.3	12.5	10.8	4.2	2.0	東1	A	空輪少し欠
S15	35	19.5	12.3	7.7	15.3	12.6	4.0	14.2	10.6	5.6	3.0	南1	A	空輪一部欠損
S22	22	18.5	10.7	7.8	14.7	11.8	6.4	14.0	10.5	5.2	1.5	南1	A	
S24	3	18.5	10.5	8.0	15.6	17.2	5.7	15.2	11.4	5.2	2.4	南1	A	ほぼ完形
S25	9	*(17.2)	9.7	*(7.5)	15.5	13.1	4.9	14.0	11.0	5.2	*(1.7)	南1	A	底部突起一部欠損
S26	11	20.1	10.7	9.4	16.1	13.6	5.0	15.5	12.1	5.0	3.2	南1	A	空輪約1/3欠損
S27	19	18.9	10.1	8.8	13.6	12.5	6.3	14.2	12.6	5.7	2.0	南1	A	所々欠損
S28	20	*(14.6)	9.0	5.6	14.5	12.0	4.9	13.5	10.0	*(5.0)	*(1.2)	南1	A	底部突起など欠損
S29	25	*(15.1)	9.0	*(6.1)	16.0	13.7	5.0	15.4	12.3			南1	A	底部突起欠損
S30	30	21.6	11.0	10.6	16.2	12.8	5.8	16.2	12.5	6.2	3.8	南1	A	空輪一部欠損
S31	31	*(19.6)	11.5	*(8.1)	16.7	14.1	5.5	16.0	12.5	5.1	*(2.1)	南1	A	底部突起一部欠損
S32	36	19.8	9.6	10.2	15.0	12.8	6.0	15.3	12.3	5.3	3.4	南1	A	ほぼ完形
S33	41	20.7	10.6	10.1	15.5	13.8	6.0	14.2	11.5	5.5	3.2	南1	A	空輪一部欠損
S34	42	*(17.2)	*(10.2)	7.0	*(14.5)	12.8	6.0			6.2	3.5	南1	A	縦に1/2欠損
S35	52	*(17.6)	10.0	7.6	16.5	13.5	5.5	16.3	12.5	4.4	*(1.5)	南1	A	風輪・底部突起欠損
S36	67	17.0	6.9	10.1	13.8	12.5	6.3	13.2	10.3	6.3	3.1	南1	A	空輪1/6欠損
S37	80			6.1			5.3		10.3	5.5	3.2	南1	A	風輪1/6残
S38	106	*(14.8)			*(16.0)	14.8	7.2	16.3	13.2			東2	A	空輪・底部突起欠損、風輪1/3残
S39	113	17.3	8.9	8.4	14.4	12.2	5.5	14.5	10.3	5.3	2.5	東2	A	完形
S40	114	18.6	10.3	8.3	14.5	11.7	4.9	14.0	11.5	5.5	2.5	東2	A	完形
S41	127		*(9.0)		*(14.0)							南1	A	空輪のみ1/6残
S42	135		8.7			*(12.5)	*(4.5)					南1	A	空輪1/4残、残存状況不良
S43	203	*(17.7)	11.0		14.9	11.6	5.5	13.8	11.5	5.7	*(1.0)	東1	A	底部突起欠損
S44	206	*(22.2)	14.4		16.6	14.2	7.0	15.3				東1	A	空輪宝珠形、底部突起含めて風輪1/3欠損
S45	207		*(9.2)		*(13.1)	*(11.3)	4.5	11.7	10.7	5.6		東1	A	縦に2/3欠損
S46	208	*(16.9)	10.2		16.0	13.8	5.6	15.6	12.0			東1	A	底部突起ほか欠損多い
S47	2-6	*(15.2)		9.5	*(12.4)	10.9	5.7	13.6	11.2	4.6	3.7	南2	A	用地外

空風輪計27点

火輪

掲載 番号	調査 時番 号	a	b	c	e	g	h	i	j	k	l	出土 地点	石材	備考
S12	209	12.9	5.6	7.3	9.0	4.5	10.0	5.7	19.2	19.1	3.9	東1	A	
S16	38	12.7	8.1	4.6	6.5	4.0	9.8	5.8	20.2	20.0	6.2	南1	A	
S19	7	16.4	8.5	7.7	10.7	4.6	13.7	8.0	26.1	24.5	5.7	南1	B	
S48	8	14.3	8.2	6.1	8.3	4.5	11.8	6.2	22.0	22.2	6.0	南1	A	1隅大きく欠損
S49	12	12.4	7.2	5.2	5.5	4.8	11.2	6.2	21.1	20.0	6.9	南1	A	側面1/6欠損、上部穿孔方形
S50	13	14.5	8.5	6.0	8.2	6.0	12.3	6.5	22.7	21.5	6.3	南1	A	上部穿孔方形
S51	23	13.3	8.9	4.4	5.5	5.5	11.3	6.0	20.5	20.3	7.8	南1	A	側面欠損
S52	24	12.3	6.3	6.0	7.7	4.0	11.5	6.0	21.7	21.3	4.6	南1	A	ゆがみ大きい
S53	33	12.1	7.7	4.4	6.7	3.9	9.5	5.5	18.8	18.5	5.4	南1	A	
S54	34	11.6	7.3	4.3	7.1	4.1	13.0	5.5	20.5	20.0	4.5	南1	A	全体にいびつ、高さがそろっていない
S55	40	13.8	8.7	5.1	7.2	5.7	11.7	6.0	22.3	21.5	6.6	南1	A	上部穿孔方形
S56	48	13.1	8.1	5.0	6.0	3.9	9.0	6.0	20.1	19.5	7.1	南1	A	1隅1/5欠損
S57	53	15.3	9.8	5.5	6.5	4.9	12.5	6.3	21.4	18.0	8.8	南1	A	底辺・1隅欠損、上部穿孔方形
S58	59	13.5	9.0	4.5	6.4	4.2	10.8	6.0	19.7	20.0	7.1	南1	A	1隅欠損
S59	66	11.5	6.2	5.3	5.3	3.4	10.5	5.7	19.8	19.0	6.2	南1	A	全面風化している
S60	72	12.8	8.5	4.3	5.5	4.0	9.5	6.0	19.6	19.2	7.3	南1	A	上部欠損
S61	81					*(3.3)	*(12.0)	5.0				南1	A	上部のみ1/4残
S62	82	*(11.5)	*(7.4)	4.6	*(7.0)				*(20.6)	19.3		南1	A	上部・側面欠損
S63	105	13.1	4.9	8.2	6.3	*(3.3)	*(11.7)	*(5.5)	*(20.2)	19.4	6.8	東2	A	側面1/4欠損、上部穿孔円形
S64	107	14.2	8.6	5.6	7.0	5.2	11.1	6.1	19.2	18.2	7.2	東2	A	ほぼ完形、上部穿孔円形
S65	108	12.0	7.2	4.8	6.3	3.6	10.7	4.6	19.9	19.5	5.7	東2	A	2側面一部欠損、上部穿孔円形
S66	110	11.4	7.4	4.0	5.0	4.1	10.3	6.5	19.6	18.0	6.4	東2	A	1隅欠損、上部穿孔円形
S67	112	13.5	7.5	6.0	6.8	5.0	10.7	*(5.0)	22.0	21.3	6.7	東2	A	1隅2/5欠損、上部穿孔円形
S68	117	*(11.0)	*(6.8)	*(4.2)	*(5.2)	*(3.2)	*(11.0)	5.0	20.4	19.5	*(5.8)	東2	A	1隅欠損、風化はげしい、上部穿孔円形
S69	121	11.5	6.3	5.2	*(6.0)	3.5	10.2	5.2	20.7	20.0	*(5.5)	東2	A	ほぼ完形、風化はげしい
S70	124	13.4	9.2	4.2	4.8	4.0	10.3	6.1	18.7	17.0	8.6	南1	A	上部1部欠損、残存状態良好、上部穿孔円形
S71	126	15.2	9.0	6.2	7.5	5.6	12.2	6.5	20.4	19.5	7.7	南1	A	ほぼ完形、上部穿孔方形
S72	130			4.4	*(5.0)				22.3	21.9		南1	A	上部欠損
S73	139	12.6	6.8	5.8	7.0	4.9	9.9	5.9	19.9	19.4	5.6	南1	A	1隅欠損
S74	140	17.2	9.2	8.0	9.7	7.1	13.2	7.8	25.2	24.8	7.5	南1	A	ほぼ完形
S75	204	13.9	9.4	4.5	7.0	4.6	11.9	6.4	21.1	21.0	6.9	東1	A	ほぼ完形
S76	0-2	15.4	10.0	5.4	7.8	5.2	11.0	7.0	22.7	22.5	7.6	南1	A	底面くりぬきあり
S77	3-4	14.0	9.3	3.7	5.5	5.9	12.8	5.6	24.0	*(23.5)	8.5	南3	A	用地外、2辺欠損、上部穿孔円形
S78	3-8	13.5	7.8	5.7	8.0	5.0	11.5	6.5	19.8	19.5	5.5	南3	A	用地外、縦の線刻
S79	3-3	12.2	7.7	4.5	6.3	5.3	10.2	5.3	18.3	18.0	5.9	南3	A	用地外、縦の線刻、1辺欠損、上部穿孔円形
S80	2-8	13.2	9.2	4.0	4.7	7.3	13.5	8.5	21.7	19.7	8.5	南2	A	用地外

火輪計36点

## 水輪

掲載番号	調査時番号	a	b	c	d	e	出土地点	石材	備考
S13	202	13.1	7.0	21.0	16.7	15.5	東1	A	側面一部欠損
S17	21	12.5	6.1	16.7	12.6	13.5	南1	A	
S20	43	18.5	11.5	26.3	14.2	15.2	南1	B	
S81	2	*(19.0)	7.5	20.4	*(16.4)	16.3	南1	A	1/2残、上面一部欠
S82	27	12.2	6.2	17.2	13.0	12.5	南1	A	上部1/6欠、そろばん玉形
S83	28	14.1	7.1	21.2	16.5	17.3	南1	A	
S84	37	11.9	6.6	19.7	16.0	16.0	南1	A	2/3残
S85	45	14.5	7.5	19.5	13.3	11.7	南1	A	
S86	46	13.9	7.2	20.5	15.0	14.5	南1	A	
S87	58	14.3	7.0	20.9	16.6	15.5	南1	A	
S88	63	12.7	6.5	18.2		12.5	南1	A	1/2残、側面欠損あり
S89	69	14.4	7.5	18.5		12.0	南1	A	上面1/3欠
S90	71	15.3	8.3	20.2		14.7	南1	A	1/2残
S91	73	*(15.5)	9.0				南1	A	1/4残
S92	74	*(9.9)	6.0				南1	A	1/6残、直径復元できず
S93	101	14.1	6.5	20.6	16.0	15.5	東2	A	完形
S94	102	10.0	4.5	16.4	*(13.5)	13.2	東2	A	完形、天井が凸で丸い
S95	103	13.9	7.0	19.2	14.5	14.3	東2	A	側面一部欠損
S96	104	14.3	6.5	20.1	*(15.4)	*(15.0)	東2	A	上下欠損
S97	111	14.2	7.5	19.4	14.9	14.3	東2	A	完形
S98	123					*(14.0)	東2	A	1/8残
S99	129	12.1	6.0	18.2	12.3	12.7	南1	A	ごく僅か欠損
S100	133						南1	A	1/10未満、計測不能
S101	141	*(14.5)	*(7.5)			*(13.8)	南1	A	1/6残
S102	142	*(15.7)	*(8.0)	*(19.5)		*(13.2)	南1	A	1/3残だが形状不明
S103	200						東1	A	1/8未満、計測不能
S104	201	12.5	6.5	*(17.5)	*(14.0)	13.2	東1	A	側面1/4欠損
S105	3-5	15.5	7.8	21.2	16.2	16.3	南3	A	用地外、一部欠損
S106	3-6	14.4	7.7	21.2		16.1	南3	A	用地外、上部欠損
S107	3-7	14.3	7.4	19.8	14.0	15.2	南3	A	用地外、上面楕円形
S108	3-9	15.0	7.0	21.0	15.0	16.0	南3	A	用地外、完形

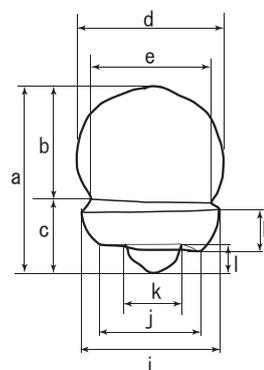
水輪計31点

地輪

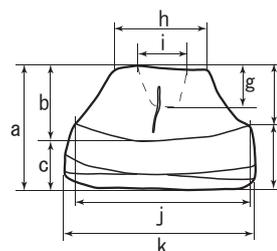
掲載番号	調査時 番号	a	b	c	出土地点	石材	備考
S14	205	13.1	22.8	23.2	東1	A	
S18	75	13.8	20.8	20.8	南1	A	
S21	16	16.3	26.0	25.5	南1	B	
S109	4	13.3	22.9	23.0	南1	A	
S110	5	12.6	20.9	20.4	南1	A	
S111	10	13.4	20.5	20.3	南1	A	
S112	14	13.3	23.3	23.1	南1	A	
S113	15	13.4	20.6	20.6	南1	A	
S114	17	16.0	24.3	23.1	南1	A	
S115	18	*(9.4)	20.8	19.1	南1	A	4片に分割
S116	26	10.2	19.1	19.2	南1	A	
S117	29	*(9.7)	20.0		南1	A	破片
S118	39	15.5	21.6	22.2	南1	A	
S119	44	11.3	22.6	22.9	南1	A	
S120	47	12.7	19.5	19.9	南1	A	
S121	49	13.5	21.0	21.0	南1	A	
S122	50	14.4	20.5	19.8	南1	A	
S123	51	*(9.9)	17.9	18.3	南1	A	
S124	54	12.6	20.2	19.8	南1	A	
S125	55	14.0	21.0	21.0	南1	A	
S126	56	13.4	20.9	19.8	南1	A	
S127	57	12.8	20.5	21.0	南1	A	
S128	60	11.0	19.5	21.0	南1	A	
S129	61	13.2	22.8	21.5	南1	A	
S130	64	11.2	21.0	20.4	南1	A	
S131	65	11.8	20.5	19.6	南1	A	
S132	68	*(9.9)	20.0		南1	A	破片
S133	70	11.6	19.8	21.1	南1	A	
S134	76	12.9	19.7	20.2	南1	A	
S135	77	14.3	20.9	19.5	南1	A	
S136	78	13.8	20.7	21.0	南1	A	
S137	79	13.5	21.5	20.5	南1	A	
S138	79	13.2	23.1	21.2	南1	A	
S139	100	14.4	20.5	20.5	東2	A	完形、上面が荒い
S140	109	*(11.0)	22.5	21.6	東2	A	上部欠損
S141	115	12.7	20.5	21.4	東2	A	上下一部欠
S142	116	*(9.5)	20.3	20.0	東2	A	上面一部欠
S143	120	12.7	20.5	20.7	東2	A	
S144	122		*(19.9)	*(20.0)	東2	A	欠損多い
S145	128	12.8	21.1	20.1	南1	A	
S146	132	14.4	20.6	21.0	南1	A	下面凹部あり
S147	134	13.2	22.1	21.1	南1	A	上面一部欠
S148	138	12.8	20.8	21.0	南1	A	風化著しい
S149	138	13.1	22.1	21.4	南1	A	上面・側面剥落
S150	210	15.5	23.4	23.7	東1	A	1隅欠損
S151	211	12.1	20.9	20.2	東1	A	下面凹部あり

部位別計測位置

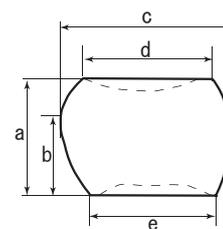
空風輪



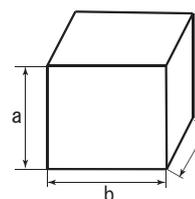
火輪



水輪



地輪



地輪計46点



1 塚1 墳丘東西断面 (南西から)



2 塚1 東側石塔出土状況 (南東から)



3 塚2 墳丘全景 (南西から)

図版 2



- 1 塚1下土坑土層断面 (南西から)
- 2 塚1下土坑完掘 (西から)
- 3 下段完掘状況 (南東から)





1 中段東側完掘状況  
(南東から)



2 土坑 1 (南西から)

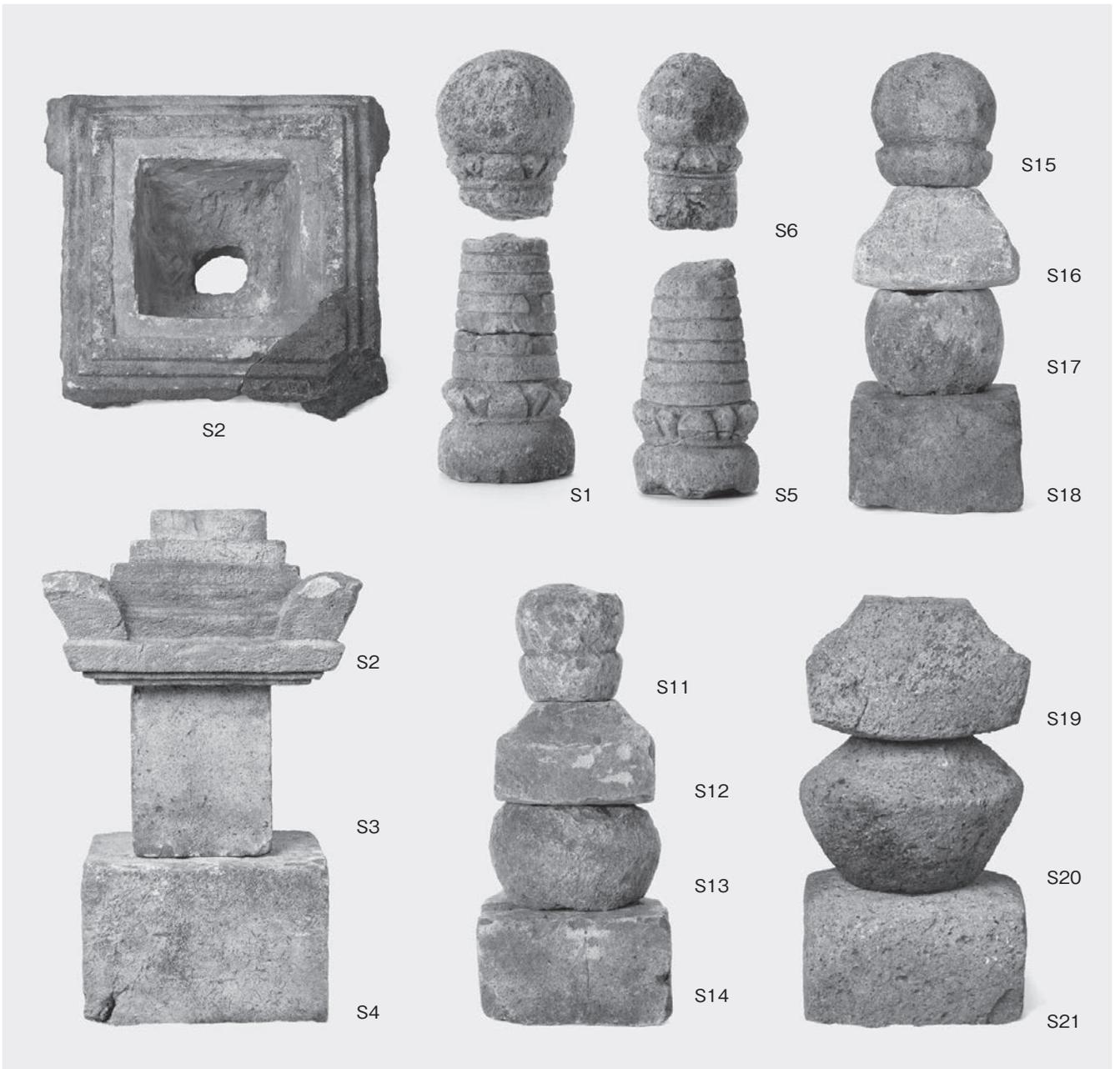


3 土坑 2 (西から)

图版 4



1 塚1周边出土石塔集合写真



2 出土石塔

# 報告書抄録

ふりがな	はつわこぼ							
書名	初和古墓							
副書名	一般国道313号（北条湯原道路）道路改築に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	243							
編著者名	氏平昭則・石田為成							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市北区西花尻1325-3 TEL 086-293-3211 URL <a href="http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm">http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm</a>							
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市北区内山下2-4-6 TEL 086-224-2111							
発行年月日	2016年12月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。 ’ ”	東経 。 ’ ”	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
はつわこぼ 初和古墓	おかやまけん 岡山県 まにあしひるぜん 真庭市蒜山 はつわ 初和479-1ほか		335890080	35° 14’ 52”	133° 44’ 36”	20151007～1215	420	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
初和古墓	集落	縄文	落とし穴2基					
	墳墓	室町	塚2基	石塔（宝篋印塔・五輪塔）				
要約	<p>調査区内で塚1・塚2の2基の塚と土坑2基を検出した。土坑は形状から縄文時代の落とし穴と考えられる。</p> <p>塚1は南北6.2m以上、東西5.5m以上、高さ1.9mの方形で、黒色土などの盛土を黄色の山土を削り残した上に施して構築されていた。盛土の下で塚の中央付近に1.7×2m、深さ1.6mの方形の土坑を検出したが、検出位置や盛土より古いと判断されるので、塚1築造の発端となったものと考えられる。塚1の築造時期は、調査前に塚1に立っていた宝篋印塔や周辺から出土した五輪塔の製作時期に近い16世紀後半と推定した。</p>							

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 243

## 初和古墓

一般国道313号(北条湯原道路)  
道路改築に伴う発掘調査

平成28年12月15日 印刷

平成28年12月20日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター  
岡山県岡山市北区西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会  
岡山県岡山市北区内山下2-4-6

印刷 サンコー印刷株式会社  
岡山県総社市真壁871-2